

# 札幌市行政評価委員会 外部評価ヒアリング③

評価対象：施策「3-4-2 魅力あふれる都市のまちづくり」に関する10事業

## 会 議 録

日 時：平成26年8月27日（水）午後4時開会  
場 所：市役所本庁舎 18階 第3常任委員会会議室

## 1. 開 会

○吉見委員長 それでは、時間になりましたので、札幌市行政評価委員会のヒアリングを始めます。

本日は、施策、「魅力あふれる都市のまちづくり」に関連する事業のヒアリングでございまして、関係する事業所管局の皆様においでいただいております。ありがとうございます。

私は、委員長の吉見でございます。今日は、よろしく願いいたします。

最初に、本日の配付資料につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

○推進担当係長 私は、事務局の推進担当係長の立野と申します。よろしく願いいたします。

まず、配付資料の確認です。

今回のヒアリングの座席表が1枚、次に、「平成26年度札幌市行政評価委員会外部評価ヒアリング③」という次第が1枚ございます。次に、委員の皆様からいただきました事前質問の回答が載っている事前質問事項一覧という3枚物が1セットございます。それ以外に、配付資料として委員の皆様のお机の上に置かせていただいている資料がございますが、A3判のカラーの表になりますけれども、こちらは市民向けのワークショップで用意している資料になります。当初、都心のまちづくり関係の資料として冊子をお渡ししておりますが、こちらの資料の方が全体の取り組み状況などをコンパクトにまとめておりますので、こういった資料で質疑させていただいた方がよりスムーズに進行できるということでお配りしております。それから、対象事業の評価調書も置かせていただいておりますが、それも見ながらご質問していただければと思いますので、よろしく願いいたします。

私からの説明は以上です。

○吉見委員長 ありがとうございます。

それでは、議事2のヒアリング（質疑応答）に入る前に、その進め方について簡単にご説明いたしたいと思っております。

まず、このテーマにつきましては、最初に所管の皆様から私どもにたくさんの資料をいただきましたが、それに基づいて私どものほうで事前に質問を準備いたしました。この質問については、所管部局の皆様から回答をいただいておりますが、それが、今、事務局から説明がありました資料1となります。

そこで、本日は、資料1を踏まえまして、この資料1にございます所管部局の皆様からの回答に対する再質問、または、ここに書いていない新たな質問も含めて、12ぐらいあるものをざっくりと幾つかに分けて各委員の皆様から質問をいただこうと考えております。そこで、質問をいただく前には、どこに関する質問なのか、あるいは、全く新しいものであればそのように言及して質問いただくと所管部局の皆さんがわかると思いますので、委員の皆さんにはそういう形で質問をお願いしたいと思います。また、所管部局の皆様からお答えいただくときにも、多分、二つ、三つまとめて質問したり、幾つかの番号にまたが

った形で質問することもあるかと思いますが、何番のものについてとか、新しい質問であれば何々についてと、何に対してお答えいただいているかがわかるようにしていただけますと後で整理がしやすいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

## 2. ヒアリング（質疑応答）

○吉見委員長 早速、始めてまいりたいと思います。

委員の皆様、よろしくお願いいたします。

まず、資料1の1番から裏側の2ページ目の4番までの四つをまとめて質問してまいりたいと思います。

これらは、いずれも都市景観事業に係るものと、それから、1番目については、都市構造強化推進事業費と、どちらかというところ全体に関わる部分でございます。

委員の皆様から再質問、追加質問等がございましたらお願いいたします。いかがでございましょうか。

○山崎副委員長 2番についてです。

これは、私も都市景観事業とはずれてしまっているかもしれないことをわかった上で、ただ、現実には、都市景観を維持するために、都市計画担当部局では普段どのようにお仕事をされているのかというところをもう少し把握したいという観点でお伺いしたいと思っております。

2番の景観の届出についてということで、建築行為の確認等の届出によってチェックしていることはご回答をいただいてわかりました。こうしたところで、例えば年間120件から150件程度と出ておまして、これは届出を出す個人とか事業者がいると思いますが、皆さん、札幌のマスタープランを理解してくれて、例えば、札幌市が言うような色彩とか建物の形状をきちんと守っていきましょうというような人たちばかりではないと思っております。奇抜な色でも、自分はこういった家に住みたいのだとか、こういう外壁にしたいのだというような人が多分いらっしゃると思っております。そうした方々がどのぐらいいて、どういふふうに行行政指導等されているのか、もう少し教えていただけますでしょうか。

○市民まちづくり局 地域計画課長の稲垣と申します。

景観事業を所管しております。

今のご質問について、従来の枠組みからご説明させていただくと、一定の規模以上のものは事前の届出をお願いしていただき、協議をする中で設計者の考え方を私どもにご説明させていただいております。それぞれ景観の基準がありまして、例えば色彩は周囲との調和を検討していただきたいとか、周辺のまち並みとの調和はどう見えるかとか、主立った通りからどのように見えるかということに配慮していただきたいと、ある種、観点を羅列して、必ずしも定量的基準ばかりでなくて、定性的にお考えを述べていただく枠組みになっています。そして、書類を提出していただくときには、チェックシート、カルテというもので自己診断していただいた診断書に設計図をセットで示していただきまして、それぞれ

の設計者のお考えを事前に伺わせていただく中で、一度で済む場合もありますし、大きな物件ですとこちらからご質問させていただいたことについて、再度、検討していただいて、また、追加の資料を出していただくような形で進めています。

今の副委員長のご質問で、端的に従わない事例ということと言うと、逆に明確に苦慮することはあまり多くありません。数をチェックしているわけではありませんが、届け出られたものに対しては、我々のほうで理解して支障がないという通知文書をお出しして、スキームとして明らかに基準から外れるであろうというものには指導、勧告というステージもあり得ますけれども、今のところ、事例としてはございません。

○山崎副委員長 都市計画というものは、都市計画法や建築基準法等での法的な枠組みがありますので、そちらのほうで動いていることもあるのはわかったつもりですが、もう一つは、マスタープランの理念というか、目指す方向を、言ってみれば価値として、理念として共有して、それで守ってもらうという部分もあるわけですね。札幌市の独自の景観ということでは、長年の都市計画行政の中で、ここ10年で建ったマンションとそれ以前では、例えば中央区などを拝見していても相当変わってきていまして、整ってきているというイメージがございます。そうした意味では、都市計画のマスタープランの価値、理念は、こういうものをつくられる民間事業者や建設業者に理解されているというような評価をすることができるかどうかについてはいかがでしょうか。

ちょっと大変雑ぱくな質問かもしれません。

○地域計画課長 大変難しいご質問です。

今、委員にご覧いただいた都市計画マスタープランは、全体のまちづくりということで、コンパクトシティというキーワードも出てくる中で、利便性の高い土地を有効に使いながらも、まち並みの質にも考慮していただきたいという大きな方向性を書いています。今、ご説明させていただいた私どもが所管している景観の届出では、さらにブレークダウンして、大きな事例となっているマンションみたいなものは景観に対する影響が大きいものですから、これをターゲットにしながら、繰り返しになってしまいますが、例えば色彩などの幾つかの観点をそれぞれセットで事前に明示しておいて考えを述べていただくようにしております。ですから、前段で語っていただく部分もございますので、大きな方向性とか地域性がどうあるのかについてはある程度の相互理解の中で共有できているとは言えると思います。

○山崎副委員長 わかりました。

続いて、3番目です。

これも、直接的には都市景観事業という枠に入らないことを私も理解した上で、これからの札幌のまちづくりでぜひお伺いしたかったことがあります。

空き家対策については、これからやっていきますということはよくわかりました。この前、たしか北海道新聞にもそうした報道が出ていたのを拝見しております。

もう一つ、札幌市独自としてこれからやっていかなければいけないと思うのは、例えば、

すすきのなどにある昭和56年以前の古い空きビルが放置されていることによる景観上の問題、プラス治安上の問題ですが、これは、これからの札幌市特有の課題として都市計画行政の中で出てくるおそれがないだろうかということです。これは、観点を変えますと、例えば、潰れてしまったホテルが景観上の問題プラス治安上の問題としてある、しかし、潰すに潰せなくて困っている、そういう観光地や温泉地が道内でも結構ございますね。そうしたことを援用して、すすきのとか大通周辺で昔の雑居ビルみたいなことが同じようなことになるおそれはないのか、そうしたことについてこれからどのように対策をお考えになれるか、可能な限りで結構ですので、ご教示いただけたらという質問でございます。

○市民まちづくり局 景観分野に関してお答えいたしますと、回答させていただいたとおりですが、現状は、空き家自体の問題も非常に多面的ですから、景観分野に限らず、札幌市全体としてどういう問題を設定し、どういう行政施策を打つべきか、ということで考えております。今、建築指導部が担当としてメインになっていますが、当然、そこだけではなくて、今後、関係部局と相談しながら検討させていただくような状況です。

ただ、正直な話、空きビルというキーワードでは、少なくとも景観を所管している私どもがトピックとして特段問題視してきた経緯は今のところありません。逆に、もし委員がおっしゃられるような形が顕在化してくる段階になると、これは個人的な推測も多少入りますけれども、景観に限らず、例えば、街中であれば商店街の活性化という観点、あるいは観光振興、さらには、古い既存の不的確建物であれば有効な土地の更新を促しながらまちをどう作り変えていくか、そういう複合的な問題になります。当然、私どもも入りますけれども、今日来ております都心まちづくり関係部局、あるいは、都市計画の土地利用制限部局、もちろん商業関係部局も入って複合的に対応していかなければいけない問題というふうに認識すべきと考えております。

○山崎副委員長 ありがとうございます。

○吉見委員長 ほかにはいかがでしょうか。

○吉田委員 2番の普及啓発についてです。

初めて聞いたのですが、カードゲームとかいろいろやっぺらっぺらするようですね。これは、誰を対象に、いつ、どのようにしたら私たちの目にも触れることができるのでしょうか。

○市民まちづくり局 今日現物をお持ちしていないのですが、この普及啓発事業自体は今年度で3年目で、市民と協働で、もっと言うと、市民自らが発信者になっていただきたいということで新しく始めた取り組みであります。市民の中で、特にまちづくりに関心のある方々がこういうカードを作りまして、景観の要素や建物の写真が入っている幾つかのカードを集めていく対戦型のゲームになっています。カードですからまずは主に子どもに訴求できると思いますが、ゲームをしながらまち並みについて認識を深めてもらう仕掛けになっていて、今の段階では児童会館等で試験的に遊んでもらっている状況です。我々職員も関与していますが、発信者になりたいという市民にお手伝いしていただいて協

働でやっております。引き続き、今年度も試験的な児童会館の場所を増やしていきますけれども、行く行くは、最近は大人もカードゲームで遊ばれるようですから、子どもだけではなくて保護者にもやっていただくなど、今後の展開はもう少し本格的なものを考えていけたらなと思っております。そんな状況でございます。

○吉田委員 ありがとうございます。

○吉見委員長 では、私から二つ伺います。

まず、1番ですが、これは、マスタープランというものがあって、マスタープランが見直されることによって具体的に何か事業に影響を与えるのかという質問でした。お答えは、ちょっとわかりにくくて、新規事業への影響は考えられるけれども、現在の事業に対する影響はないという意味かと思いますが、まず、そういう理解でいいのかどうか。

つまり、今、行われている事業が今年度で全部終わってしまうのであればいいですが、継続して行われるであろう事業には何がしかの影響があるのかなと思ったのです。特に、マスタープランがどれぐらい変わるのかもよくわからない面があって、ここに出てきている事業費は、いわばマスタープランに影響を与えるようなさまざまなことを検討することでお金が使われているように思えるわけです。つまり、それが検討されて、調査などが行われた結果、マスタープランに影響を受け、マスタープランが影響を受ければ実際に行われることにも影響を受けるのかなと思ったわけです。

ちょっと見た感じでは、少なくとも現在進行している事業については、マスタープランと新マスタープランにおいて事業に対する関係性はないという形になっているようにも思えますので、もう一度ご質問したいと思います。

○市民まちづくり局 都市計画課長の村瀬と申します。

今の都市計画マスタープランは、平成16年度に作られたものです。さらに、この都市計画マスタープランの大もとになった長期計画は、平成12年に第4次札幌市長期総合計画という形で作られました。この第4次長期総合計画では、これまでのような札幌のまちを拡大していく、市街地を外に広げていくということから、そのときには既に人口状況もそれほど伸びていかないと予測されておりましたので、拡大型のまちづくりではなくて内部を充実していくまちづくりに変えようという考えが示されました。そこで、平成16年に札幌市都市計画マスタープランをつくりまして、持続可能なコンパクトシティの再構築という目標を掲げて、今、それを踏まえて各事業が行われております。その後、平成25年に札幌市戦略ビジョンというものが作られましたが、これにつきましても、第4次長期総合計画、都市計画マスタープランで掲げていたように、拡大、成長ではなくて、内部充実していこうということをもっと進めようという計画になっております。さらに言うと、それに加えて、今日的課題であるエネルギーや低炭素、都市の安全、災害に強い都市という観点が強く盛り込まれております。

ですから、今、各部局では都市計画マスタープランを踏まえて各種事業が行われておりますので、今度、戦略ビジョンを踏まえてマスタープランを変えることになりますけれども、

第4次長期総合計画から、拡大、成長ではなくて、一貫して内部充実型をやっていこうという目標を捉えてやってきておりますから、そういう意味では、今やっている事業は、新しくマスタープランが変わっても変えていかなければならないということではないと認識しております。

一方で、これから行われる事業につきましては、先ほどご説明したように戦略ビジョンの中で新しい要素が加えられておりますので、そういう新しい要素を都市計画マスタープランにも入れ込んでいくことになります。そうすると、これから考えていく事業は、今までの事業をさらにレベルアップする、あるいは、低炭素やエネルギーという観点を追加した形で展開していくことが想定されますので、こうした表現にさせていただきます。○吉見委員長 ちょっとわかりにくかったのですが、つまり、現マスタープランに新しいものが加わるから、今やっている事業は変わらなくて、それに加わった事業がふえるだけだという理解でよろしいですか。

○市民まちづくり局 事業が増えるというか、事業の中身が変わります。新しい要素の事業になってくるということです。

○吉見委員長 新しい要素の事業ですか。

○市民まちづくり局 新しい要素が加わった事業です。

○吉見委員長 それは、現事業への影響はないという表現になるのですか。つまり、新規事業への影響は考えられるという表現になっているので、今言いましたように、今のマスタープランに何か加わる形になるのだという理解ならば、現事業に新たな事業が加わるという理解なのか、現事業が拡大するというイメージで行くのであれば、それは現事業に影響を与えることになるのかなと思ったのですが、どちらに理解したらいいのでしょうか。

○市民まちづくり局 今、お互いに話をしている事業がどういうものを指しているのか、共通した方がいいかと思います。例えばこんな事業ということが何かありましたら教えてください。

○吉見委員長 ここでは、事業名というのがはっきりしておりますので、その単位で質問しております。

○市民まちづくり局 そういう意味では、これもわかりにくい説明になるかもしれませんが、我々がこういう事業を進めるに当たって、例えばほかの事業でもこういう名称の事業がありますが、これは基本的には中期計画ですね。新まちづくり計画という中でこういう事業をやるぞというふうに決めて、4年間なら4年間でやっております。今度、新しく立てる事業は、新しい中期計画をつくって、そこでまた事業を立てていくことになりますので、継続する部分が全くないわけはありませんが、4年単位で事業が進んでいくというものです。

○吉見委員長 もう一度繰り返しますが、4年単位で切るのはいいですが、4年単位に合わせてマスタープランもそれにぴったりそろえて見直しているというふうに理解してよろしいのですか。

○市民まちづくり局 そうではないです。

○吉見委員長 そうではありませんね。

そうすると、4年単位で切れないところで新しいマスタープランが出たときに、現在進行中の事業は影響を受けずに、新しいプランとは無関係に進んでいって、4年が終わった後に次の事業を考えるとときに、2年前、3年前にできた新しいプランの影響を受けると考えるべきなのか、その辺の理解です。

○市民まちづくり局 今おっしゃったとおりです。

○吉見委員長 そういう理解でよろしいですか。

○市民まちづくり局 そうです。

○吉見委員長 わかりました。

それから、4番目に係る部分は都市景観事業の成果です。

一番最初に「客観的かつ定量的な評価基準は無い」とありますが、それはそうなのだなというふうに理解するところですか。その後件数がいろいろ書いてありますが、件数によって都市景観の成果が出たというふうに言うのも、これはこれでどうかなと思っています。

ただ、定量的な指標ではないにしても、この事業があったからこの景観が生まれていますというように、札幌市民のみんながピンとくるようなもの、この事業があったからこの景観が守れましたと。例えば、マンションの建設をやめさせましたとか、この事業があったからこういう新しい景観が生まれましたというように具体例が示されることはあります。当年度の成果として、この景観を生み出しました、この景観が完成しました、あるいは、この景観を守るために着手しましたというようなことがわかりやすく言えればいいのかと思います。

そこで、昨年度について言われたときに、市民があれかとわかるようなものは何かありますか。

○市民まちづくり局 具体的にどなたも想起できるような景観のイメージということだと、直ちには難しいというのが正直なところですか。

今、この回答票の中で個別事業を挙げさせていただいておりますが、下から三つ目に景観重要建造物助成というものがございまして、これは、文字だけではわかりづらかったと思いますが、地域のシンボルになるようないわゆる歴史的な建物、特徴的な建物の維持のために幾ばくかの助成をさせていただく制度でして、毎年、数件程度の形で助成申請があって、私どもから助成させていただいております。つまり、維持管理のための改修工事のお手伝いをしておりますので、維持管理ができずに崩されることがない、守られている状況があるというのは一つの成果として言えるかと思っております。

成果指標に関しては難しかったということもあって、このとおりに述べさせていただいておりますが、私どももご質問をいただいて中でも少し議論をしたところですけども、今、委員長がおっしゃったような事例も含めて、どういう成果を発信しながら新しいスキームを持っていったらいいのかということは、今後の課題にしなければいけないと改めて考え

たところでございます。

それは、意識だけでよいのか、もう少しいいものを発信していくのか。それに少しつながるのが、先ほどカードについてのご質問がありましたけれども、下から二つ目の市民主体の景観資源選出事業であります。これは、まさしく、市民目線でこういう景観はいいねというところを掘り越してもらって、情報通信手段を通じながら、あるいはカードを通じながら、いろいろなメディアを使って発信してくという新しい取り組みなので、そういうことも組み合わせながらいい形で効果の発信に取り組んでいきたいと考えております。

○吉見委員長 定量的ではなくて、市民からよくやっているよねと言われる意味での評価ですから、景観ではなかなか難しいと思います。日本の場合は、都市景観の維持のためのルールが緩くて、その中で自治体が上乘せするような形でやっています。それをある程度強くやれば不満も出ますので、場合によってはそこを乗り切りながらやらないといけない面も恐らくあるだろうと思います。

今の話は歴史的景観でしたけれども、歴史的な建造物以外のものも何かございますでしょうか。外国の都市ですと、高さ制限で一律揃っていますね。日本は、どこのまちでも、でこぼこして形もいろいろ違った建物ができています。あるいは、街路樹なども多くの都市では極めて標準化してしまっていて、どちらかという札幌もそっちに属しているようなまちに見えます。

いや、そうでない、札幌らしい新しいまち並みということでは、去年と言わずにもう少し広げてもいいと思いますけれども、事業の中で成果があったのはどういうところか、もしあればお教え願いたいと思います。

○市民まちづくり局 今のお話に関連しますと、最初の山崎副委員長のご質問の中で一般的な大きな建物の届出のお話をさせていただきましたが、別途、重点区域を定めてしまして、事例を挙げると駅前通、大通公園と本当に重要なポイントを決めて通常の基準より少し上乘せした地区があります。例えば、建物の壁面を揃えてほしいとか、駐車場の出入り口は設けないでほしいとか、少し踏み込んだようになっております。そういう形で、誰しもが大事なポイントだということは、事前に少しルールを明確にしておいて、都市計画の地区計画制度という土地利用制限と連動させるようにして、個別の開発についてご相談させていただきながら新しい景観づくりをやっております。

さらに、それ以外の一般的なほかの市街地にも次の新しい景観ルールが必要ではないかという問題意識もありまして、これは、5番で質問をいただいていたのですが、地域街並みづくり推進事業費という新しい事業になります。今、まずは電車の沿線地区をターゲットにモデル地区にしていますが、景観の切り口で地域の方と新しいルールを合意して、地域の方も愛着を持てる満足なまちを作っていくための新しいルールがどうあったらいいのか、まさしくトライし始めたところでありまして、都心部の観光地に限らず、景観のルールもそういう形で少しずつバージョンアップしていきたいなという段階でございます。

○吉見委員長 ありがとうございます。

委員の皆様から、ほかに何かご質問はございませんでしょうか。  
よろしゅうございますか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 それでは、必要があれば後ほど振り返ってご質問をしていただくことにいたしまして、先に進みます。

次は、5番から11番までまとめます。数はたくさんありますが、7番から11番は関連性があって一つにまとまっておりますので、実質三つかなと思います。

それでは、5番から11番までにつきまして、委員からご質問はございますでしょうか。

○吉田委員 6番の質問の意味です。

一枚の絵というのは、抽象的な意味ではなくそのもので、本当にわかりやすくこういう都心を目指すのですよと市民に提示するものがあるのかなと思ったのです。お答えを読んで、ホームページとかも見たのですが、やはりよくわかりませんでした。最終的にどんなまちになるのだろうというようなビジュアル的なものがあるのかなという質問でしたので、それがどうか。それから、今後は市民を巻き込むのであれば、パッと見たときにわかるようなものをつくって提示することが本当に必要だと思いますので、そのような計画はあるか、再度、教えてください。

○市民まちづくり局 都心まちづくり課の奥村と申します。よろしく申し上げます。

今、委員がご指摘のビジュアルとしてあるか、ないかと言われますと、正直言いまして、ないというのが現状です。

追加の資料ということで、カラー版のものをお手元に配付させていただきました。この中で、例えば、1ページ目の一番左下にありますが、イメージとして、平成14年に策定した現行の都心まちづくり計画については、4軸3交流拠点とありまして、いわゆる都心のまちづくりはここで先導していくことを計画として掲げております。それに基づきまして、この軸にあるとおり、これまで駅前通地下歩行空間、あるいは創成川公園やアンダーパス化の整備をしてきております。それからまた、右側には、都心の目指すべき方向性として三つの方向性を掲げております。これは、まさに、都心には都市機能の集積、高度化を図るとか、あるいは、都市空間やエネルギーのネットワーク、さらにエリアマネジメントの展開という三つの柱で都心のまちづくりを進めていきますということで、ホームページ上でも掲げております。

しかし、委員がおっしゃったとおり、具体的にここがこう変わりますとか、5年、10年先にここがこうなりますというようなビジュアルのものはありません。そこはちょっと難しい面がございまして、特に都心につきましては、行政が施設を整備するものもあれば、民間開発といかに連動していくかということもございまして、そういった意味では、民間主導の開発が表に浮かび上がってくる時期的なものもあって、その辺は難しいところもあろうかなと思っております。

ただ、我々は、都心のまちづくりが今後どう進んでいくのかということをも市民にわかり

やすく説明する義務があるだろうなと思いますので、今後、ホームページの活用についても、どういうふうに情報をお見せしていくのか、考えなければならない課題かなとは認識しています。

○吉田委員 よく読めばわかるのですけれども、市民一人一人は、自分がそれをどう活用できるかというイメージだと思います。一枚の絵というのは、もちろんおっしゃるとおり、まだ出せないものや、民間との連携時期ということとはよくわかるのです。ただ、全部連携しているものだと思うので、例えば、こういう札幌市民がここを利用する場合はこんな活用の可能性が生まれるとか、市民視点の発信の仕方を少しやっていただけるといいのかなと思いました。

○吉見委員長 ありがとうございます。

それでは、7番から11番の相互関連性です。

こういう図もいただいて、エリアはこういうふうになっていることは重々わかりますが、それでも関連性がよくわからないのです。それぞれの目的としているところはわかるけれども、文字で「にぎわい」とか抽象的に言われてもよくわかりません。わかりやすいところでいけば、これらの軸に使っているベンチの色使いは全部統一したとなれば、これは話し合っていなければできませんから、当然、関連性がありますね。ただ、重なっている部分があるというだけでは関連性にならないと思うので、どこで、どういう人の流動があって、そのためにはこちらにはこういう役割を持たせるとか、つまり、一つの軸に集めるのではなくてほかの軸に押し出すような役割、それはそちらに行ってくれというような役割を持たせるとか、そういう関連性が見えるものがあればわかりやすいのです。でも、このままだとちょっとわかりにくいです。

例えば、面を揃えるのも一つの関連性ですが、そうはなっていないですね。つまり、駅前部分は地下歩行空間をつくってしまいましたから、地下歩行空間から地下のまま創成川通に行けません。創成川通は地下にありませんので、必ず上らなければならない。そうすると、これらの軸の間の人移動は、やはり上がったたり下りたりしてでこぼこを必要とするわけです。これは、ある意味では連関性をとれておりません。ですから、そういう意味ではないだろうなどと思うわけです。

そのように、相互の関連性、連関性を示すようなことはどこで見ることができるのか、具体例などがあればお教えいただければと思います。

○市民まちづくり局 なかなか難しいご質問かなと思いますが、例えば、三つの交流拠点を定めております。これらの三つの交流拠点で、特に札幌駅交流拠点と大通交流拠点を結んだのが「チ・カ・ホ」だというふうに我々は考えておまして、そういう計画の仕立てにもなっておりますので、そういう意味での連続性はご理解いただけるかなと思います。

あるいは、大通交流拠点は、まさに駅前通と大通が交差している一帯のことを言います。ここは、この四辻の地権者の方々にお集まりいただきまして、この四辻をどういうふうにしていくのかというガイドラインを策定しております。そういったところで、まさに、交

流拠点をどのようにしていけばいいのか、その際に四辻の地権者の方々がビルを建てかえるときには一定のガイドラインに沿って建てかえるように促しているということがございます。

それから、委員長がおっしゃったとおり、創成川公園と「チ・カ・ホ」は実際に地下で結ばれていません。それは、当然、何らかの地下歩道を新たに整備すれば、そういった意味での関連性、連関性は出てくるのかもしれませんが、やはり現実的に建設費用の問題もありますから、我々としては、若干でこぼこすることかもしれないけれども、地上と地下が一体となってある程度の連続性が確保できればいいのかな、そういうところから段階を踏んで少しずつ連携をより一層深めていけばいいのかなという考え方でいるところです。

私もうまく表現できないのですが、そういった意味では、委員長がおっしゃるとおりに連携がとれていないことになっているのかもしれない。

○吉見委員長 別にでこぼこしていると批判しているわけではなくて、恐らく、別の観点で相互連関性があるのでしょうかということなのです。相互連関があると言うのであれば、例えば、面を一つにするという目標があって、それでやられた事業かということ、最初からそうではないだろうと思うのです。もしそうであれば、地下なのか、地上なのかという議論もあった上で、それを揃えるように事業が進んでいったはずですが、そうではないのですね。

先ほどの例は、そうしなければいけないと言っているわけでも何でもなく、批判しているわけでもなくて、では、ほかの視点での相互連関性とは何でしょうかという質問です。例えば、創世交流拠点という事業では何か連関性があったのでしょうか。これは、交流拠点のまちづくりですね。

○市民まちづくり局 はい。

○吉見委員長 交流拠点まちづくりというのはそれぞれ事業になっているので、それと都心エリアマネジメントとか、あるいは、南1条のまちづくりの事業化を検討するときに、そうした既存の事業との連関をどう取るかということです。例えば、大通交流拠点を一つの拠点として人を集めていくことを考えるのであれば、南1条には人が集まらないようにすると言うと語弊がありますが、少なくともそこが拠点として人が賑わって大通交流拠点から人が流れてしまうことがないようにしようとするのか。つまり、それぞれの事業が自分のところの事業として単独で行われてしまわないような、そういう連関ですね。例えば、我々も地下歩行空間を歩いていて思うのですが、1歩横の通路に入れば全く雰囲気が変わってしまったりして、景観という点でもその段階でばらばらですね。しかし、こういう形で都心のまちづくりの絵を描いておられるので、やはり、連関を取って行って、それこそ地下でも地上でも雰囲気であるとか景観の統一感を持ってやるようにしているのか。既存のデザインを地下歩行空間で使ったとしたら、そのデザインのあり方は新しくつくるものも同じように踏襲するとか、そんなことなのかどうか。私は、わからないので勝手に言っていますが、そういう意味で前の事業、横の事業と同じものを作っていくとか、連関

させる面はありますかということであります。

○市民まちづくり局 そういった意味では、我々は回遊性を向上させると使っているのですけれども、まさに今の例で言いますと、大通交流拠点の整備を進めておりまして、そこに多くの人滞りしたり、集まっていたり、その人たちが次の目的地に移動しやすいような空間ネットワークを第一に考えようとしております。そういった意味で、大通交流拠点にいる人が南1条の商店街を利用される場合に、その回遊性、動線を確保するために、南1条の地下に通路が必要かどうかと。さらに、創世交流拠点で言いますと、北1条西1丁目地区の再開発が事業の一つになりますが、その事業の進捗に合わせて西2丁目の地下歩道の整備を計画しております。北1西1の建物ができると、西2丁目の地下歩道が丸井の横までつながることになりまして、まさに南1条の地下歩道とクロスしていきます。そうすると回遊性の動線として確保されるだろうということで、我々は空間のネットワークという意味での相互連携に非常に重きを置いて考えているところでございます。ただ、その必要性があったらいいね、ではなくて、本当に必要なかどうかは、市民との議論でさらに深めていかなければならないと考えています。

○吉見委員長 わかりました。

先ほど景観の話がありましたけれども、そういう設備とか景観とか、あるいは看板などのサインのあり方は、こういう都心のまちづくりを一体的に考えるときに考えられないのですか。それも相互連関性だと思うのです。

○市民まちづくり局 事業調整担当課長の高田と申します。

私は大通交流拠点、創世交流拠点の整備の担当をしておりますので、この二つを例にお話しさせていただきたいと思っております。

大通交流拠点は、ガイドラインをつくって四辻の地権者と合意してまちづくりを進めてきましたが、そのガイドラインの考え方として大通公園に対してセットバックを持つという考えを持っております。ただ、大通交流拠点と創世交流拠点は大通でつながっておりますから、大通でセットバックしているのに創世交流拠点で違うのはどうかとなると、やはり創世交流拠点のまちづくりも一つの考え方に基づいて進めていかなければならないと認識して、我々もそういう拠点整備の考え方を持って進めていこうとしております。

○吉見委員長 ほかに何かいかがでしょうか。このあたりではございませんか。

よろしゅうございますか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 それでは、最後の12番です。

これは、ソフト事業についてということで、各対象事業ですから全てに関わるのかもしれませんが、ご回答も非常に長くなっております。

○松本委員 多くて恐縮ですけれども、三つ質問があります。

まず、1点目は、地下歩行空間の利用についてです。

賑わい創出のためにいろいろなソフト事業を実際にやられていて、使われている方もか

なり多いかなという印象を持っていますが、その利用に関して一定のルールみたいなものがあるのかどうかをお聞きしたいと思います。かなりうろ覚えですけども、従前、商業的な目的はだめですと聞いたことがあるような気もする反面、最近はいろいろなお店も多いので、有料、無料とか、あるいは、こういう目的だとよいとか、何かそういうルール化みたいなものがあるのかということが1点目です。

それから、2点目は、特に都心部のソフト事業という点で、地下歩行空間以外の地域でのソフト事業としてどのようなものがあるのか、知りたいと思います。

そして、関わりがありますので、先に3点目の質問を申し上げます。

3点目の問題は、地下歩行空間はイベントも含めてかなり賑わいが多いなと思う反面、例えば、大通より南のエリアから人が移っただけではないかという意見を言う人もいますし、地下歩行空間から上に出れば寂しいときもあります。そこで、札幌市は軸と言っていますが、地下歩行空間で人が増えているということが、ほかの近接エリアの賑わい創出や集客にどのように役立っていると評価されているのか、知りたいと思います。

戻りまして、2点目ですが、私が先ほど地下歩行空間以外のソフト事業を知りたいと質問した趣旨は、今の3点目の問題意識にも関わりますけれども、地下歩行空間を中心に人が多く集まっているところの方々が来るような仕組みをほかで何かしているのか、あるいは、都心部の別のエリアで人を集める独自の工夫をしているのか、あるいは、今日はこういう日というようなことを決めて、地下歩行空間に限らず、まち全体で広く、例えば札幌駅からすすきのエリアに人が広く集まるような集客イベントを行っているのかというあたりを教えてもらえればと思います。

ソフト事業というのは、必ずしもイベントに限らず、例えば、ごみの管理とかクリーンなまちづくりでも何でもいいと思っておりますが、そういうソフト事業を何か行っているのか知りたいと思います。

○市民まちづくり局 都市交通課の田辺と申します。

まず、地下歩行空間の利用のルールでございますが、確かに条例で禁止行為を定めております。広場は公の施設でございますが、指定管理者でもそれに沿って利用規約を作っておりますが、物販は指定管理者の承認を得て実施しているところでございます。

○松本委員 では、かなり広く、よほど変な目的でなければ、割と自由に使えるようなルールになっているということですか。

○市民まちづくり局 そうですね。例えば、危険な行為とか騒音を発したりしない限り、比較的広く利用することは可能です。

○松本委員 経済的な意味でも、有償、無償を問わずかなり自由になっていると。

○市民まちづくり局 そうですね。

○松本委員 わかりました。

○市民まちづくり局 「チ・カ・ホ」以外でのソフト事業というご質問について、幾つか具体的にご説明させていただきたいと思います。

例えば、大通公園から南を我々は大通地区と呼んでおります。ここには、平成21年に札幌大通まちづくり株式会社という会社が設立されておまして、地域の賑わいづくりの活動に取り組んでおります。皆さんもご承知かと思いますが、夏場の週末には駅前通と南1条通を歩行者天国にしまして、道路空間を活用した賑わいづくり事業をやっております。また、大通地区で申しますと、最近は違法駐輪も結構大きな問題になっておまして、そこをどういうふうに解決していこうかということで、まさにまちづくり株式会社を中心にしながら、地域の方々と普及啓発活動や違法駐輪の整除活動のような取り組みもございます。また、すすきの地区に行きますと、クリーン薄野活性化連絡協議会ということで、すすきの観光協会の方とか各通会の方々、警察等の関係機関で構成している協議会がございまして、その中でいわゆる活性化イベントを展開しております。先日も、7月にはすすきの音楽祭がありました。これは、シティ・ジャズとコラボしまして「SAPPORO CITY JAZZ in SUSUKINO」というものをすすきのでやっておまして、これも歩行者天国にして道路空間を活用した賑わいづくりのイベントですが、そのようなこともやっております。

我々としては、それをエリアマネジメント活動と捉えていますが、地域の人たちが主体になってそういった活動を行っていく、それを我々行政も支援させていただくというようなことでございます。

○松本委員 3番目の質問は、どこが所管ということはないのかもしれませんが、先ほどちょっとだけ触れたように、地下歩行空間には人が増えたという個人的な印象がある反面、ほかの地域の人が地下歩行空間へと移っただけと。例えば大通から札幌方面に移っただけのような気がしますし、あるいは、ほかの地域の賑わいという意味では、まだそれほど増えていないのではないかなという感覚を持っています。そもそも現状認識が正しいのかどうかも若干わからないところがありますが、その点の評価と、波及させていくような取り組みとして何か行っていることがあるのか、お聞かせください。

○市民まちづくり局 地下歩行空間の完成によりまして歩行者量は実際に増えております。追加で配付させていただいたお手元の資料の2枚目にも、駅前通の通行量としては完成前と完成後では大きな違いがありまして、2倍から3倍ぐらい増えています。また、これらの影響につきましては、例えば、大通地区の商業関係者にお話をお伺いしますと、やはり、「チ・カ・ホ」ができたことによりまして商品の売上げが確実にプラスになっているというお話も聞いております。各個店の売上げ数字は押さえておりますが、そのようなお声も聞いているところでございます。

そういう意味では、「チ・カ・ホ」の賑わいを大通地区に持っていくために、大通地区の商店の方々が「チ・カ・ホ」の広場を活用して自分たちの店のPRするなど、大通の人たちもぜひ自分たちのところにも流れてきてほしいという思いもありますので、一部ではそういった連携事業のような取り組みをさせてもらっています。

○吉見委員長 ほかに何か。

○吉田委員 今のお話にもつながりますけれども、多様性と回遊性と言って、今、取り組んでいらっしゃることは確かに多様性は出てくると思います。今の地下歩行空間の賑わいも素晴らしいですし、まちづくり会社の方たちがアイデアを出しいろいろなことをやっているのは、第1段階としては素晴らしいと思います。

ただ、回遊性を考えたときに、もしも総合プロデュース力がないままに進んでいくと、ただ単なる場所の問題になって、こっちでイベントをやってください、私たちのところでやってくださいと取り合いになる可能性も最悪の場合には出てくるのではないかと思います。さっき、地下歩行空間は危険なものでなければ何でもできるとありまして、今の状態を見てもそうですね。いろいろ雑多なものがあります。でも、ここでは、にぎわいの軸とかやすらぎの軸というように、一応、役割的なものが何となく示されていますから、みんな一体でありながら、それぞれの場所の価値をプロデュースしていく視点がないと回遊性は生まれないのではないかとちょっと危惧されます。そこで、そのプロデュースをする役割はどこが担っていくのか、ぜひ知りたいと思います。

○市民まちづくり局 我々としては、それをプロデュースしていくのは、やはり地域の方々のエリアマネジメント力をいかに発揮するのかということだと捉えております。当然、行政としていろいろな意味で支援をする必要があると思いますが、それは地域の人たちが自分たちの地区をどうしていきたいのかということがないと、まちづくりはなかなか進んでいかないのだろうなと思います。

あとは、各地区のそれらを結びつけて、さらに総合的にプロデュースするというのも都心の中では必要かなと考えております。それについては、我々は、今まさに今年度から新しい都心のまちづくり計画をつくる準備を進めているところですが、エリアマネジメントの次の段階として各地区をトータルでプロデュースするようなマネジメント体制がどういうものなのか、実は計画策定の中で少し考えていきたいと考えております。

○吉田委員 それは、本当にシンプルに言えば、ここにある協議会とか、それぞれでやっているまちづくり会社とか、いろいろなところが集まって具体的に考えるというのも一つの手だと思いますけれども、札幌市としてそうしたものを示していくということですか。その仕組みは作っていく、総合的にプロデュースできる力づくりをちゃんとやっていくという理解でよろしいですか。

○市民まちづくり局 我々も都心の人たちと一緒に枠組みを考えていきたいと思います。

○吉田委員 それは、示されるということですか。

○市民まちづくり局 新しい都心まちづくり計画は平成27年度に策定しようと思っておりますが、その中で新たな絵姿を示していきたいと考えております。

○吉田委員 今それぞれで頑張ってもらっているのは、それに対する基盤づくりをやっているという理解でよろしいですか。

○市民まちづくり局 そういうふうに考えていただければと思います。

○吉田委員 わかりました。

○吉見委員長 私からもう一つ伺います。

これは、もしかすると全く新しい質問になるかもしれませんが、まちづくりといたときに、今は都心のまちづくりに視点が行っていて、今回の市民ワークショップでもそういう形で議論されますので、大通、札幌駅地区を中心とした都心をどうするのが大きな話題になるのは間違いないし、まさにそこが注目される場所です。

ただ、それ以外のところでも、今日いただいた資料等々で言えば、例えば先ほど路面電車の沿線の景観を考えたいという話がありました。また、12番では真駒内地域についての言及もございました。真駒内の場合は、恐らく学校の統合もあって、駅近くに空き地ができていることも関係しているのかなと思います。札幌は、大きなまちですので、都心もさることながら、副都心も持っております。その意味では、例えば新札幌は副都心として開発した地域ですし、あるいは、比較的古くから副都心機能を果たしてきた琴似、北24条、さらに地下鉄の延伸に伴って麻生といったところも副都心機能を果たすようなある種の交流拠点になってきていたと思います。

そこで、これらについては、何か今後のまちづくり、札幌という都市のまちづくりを考えたときに、位置付けとか、これらに手を入れていくとか、ビジョンといったことはあるのかどうかということについてお伺いしたいと思います。

何でもやるという方向もあるのかもしれませんが、今日、別のキーワードとして出たコンパクトシティのことを考えますと、まさに都心に力を入れるのはそういうところの反映でもあると思います。しかし、裏を返せば、あまり広げないという観点からは、広がった都心には撤退してもらおうというビジョンもあるのかもしれませんが。ですから、そのあたりのビジョンがもしあるのなら、都心以外、あえて言えば副都心の位置付けはどのように考えられているのか、今の中ではどのような事業における位置付けになるのか、お伺いできればと思います。

○市民まちづくり局 先ほど、第4次長期総合計画の話とか都市計画マスタープランの話をしました。あるいは、昨年、戦略ビジョンができました。これらの中では、都心は大きな拠点としていろいろなことをやっていくぞということが書かれております。そのほかにも、地域中心核、あるいは、地域交流拠点という呼び名をしておりますが、省略して拠点というふうに呼びますけれども、拠点というふうに位置付けている各エリアがあります。それは、例えば、3線ある地下鉄の全ての始発駅であったり、環状線の近くにある地下鉄駅、北24条、白石、琴似、月寒等々を拠点というふうに位置付けておまして、都心のみならず、それらの拠点の整備についても今までもずっと取り組んできております。

最近の取り組みとしましては、新札幌のお話が出ましたが、今、新札幌では市営住宅の建て替えをやっておまして、これは都市局で担当しておりますけれども、その余剰地をどう活用していくかということの基本にした新札幌のまちづくり計画を地域とお話ししながら今年度中に策定する予定としております。あるいは、先ほどの真駒内は、平成25年に真駒内駅前地区まちづくり指針というものをつくりまして、今、これから事業をやって

いく上での計画作りに向けていろいろと検討しております。

そのほかにも、都心に近い苗穂につきましては駅の移転、橋上化、駅前広場等々の整備、あるいは、これからになります、北区の篠路につきましても鉄道の高架と駅広場の整備を検討していくことになっておりまして、今、都心と地下鉄沿線、JR沿線の拠点の育成を均衡よくやっというと考えているところでございます。

○吉見委員長 イメージとしては、いろいろな拠点を、まずはここ、次はここ、という感じで作られていくのか、それとも、押しなべて毎年同じようなレベルで、ごくわずかずつでも予算を入れながら全体をじわじわと上げていこうという考え方なのか、どちらでしょうか。

○市民まちづくり局 全体をじわじわではなく、それぞれの拠点での開発の動き、あるいは、地元の動き、市の公共事業の動きと合わせて、熟度と言っておりますけれども、熟度に合わせて計画、事業を進めていっております。

○吉見委員長 そうすると、今回は今の事業年度等々で見えていますから、こういう資料をつくれば真駒内がクローズアップされてきているけれども、もう終わったところ、あるいは、将来やられるであろう拠点がまだあるという理解でよろしいですね。

○市民まちづくり局 そうです。

○吉見委員長 ほかにいかがでしょうか。

○松本委員 もう一回、地下歩行空間の点で、細かい質問で大変恐縮です。

地下歩行空間は、利用者がお金を支払うことは原則不要なのですか。あるいは、札幌市がお金を徴収することは可能ですか。

質問の意図としては、まちづくり、特にハードをつくると、お金もかかり、維持管理費等もかかるかと思えます。民間の力をうまく活用したり、場合によっては市が責任を持つにしても、きちんと回っていくように少しでも収益を上げられたらいいのではないかと思います。法律の規制もあるのかもしれませんが、そういうことは可能な仕組みになっているのですか。

○市民まちづくり局 広場につきましては、条例で使用料を定めておりまして、その範囲内で指定管理者が使用料を定めております。利用料金制度という仕組みをとっておりまして、指定管理者がその収入を経費として入れているところです。

○吉見委員長 広場だけでなく、横の白くなっている部分にワゴンの店などが出ていますね。あそこも使用料が要るのですね。

○市民まちづくり局 空間は20メートルの幅員がありますが、中心が12メートルの歩行空間で、その両脇は憩いの空間ということで広場になっております。

○吉見委員長 そこも広場と呼んでいるのですか。

○市民まちづくり局 そうです。

○吉見委員長 ですから、いわゆる北3条の広場だけではなくて、横の道にワゴンの店が出ていますが、それも全部使用料を払っているということですね。

○市民まちづくり局 そうですね。交差点広場のほかに、細長い部分も広場の対象でございます。

○松本委員 急な質問なので、難しいかなとは思いつつ、可能であれば教えてほしいのですが、年間で幾らぐらいの収入があるのですか。

○市民まちづくり局 チ・カ・ホの収入は、広場使用料で年間5,000万円ほどです。

○吉田委員 結構入るのですね。

○市民まちづくり局 はい。

○吉見委員長 確かに、自由に使おうとすると少しハードルが高い設定になっております。

100円、200円では借りられません。

ほかにいかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 それでは、予定しておりました部分については全て終わりましたので、ヒアリング(質疑応答)を終わりたいと思います。

所管局の皆様は、ここまででございます。ありがとうございます。お疲れさまでございました。

[所管部職員は退室]

○吉見委員長 我々は、議事の3の意見交換(論点整理)を行いますが、その前に座席の変更を行いますので、5分程度の休憩をとりたいと思います。

[ 休 憩 ]

### 3. 委員による意見交換(論点整理)

○吉見委員長 皆さんが戻られましたので、再開したいと思います。

まず、意見交換をしまして、それが終わりましたら、市民ワークショップについての打ち合わせが控えております。

まず、先ほどの魅力あふれる都市のまちづくりに関連してディスカッションをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○山崎副委員長 今回のヒアリングでは、明瞭な形で問題が表れなかったのですけれども、これからのまちづくりで留意すべき点ということでは、都市計画部だけではなく、他の部局との連携を一層図ってほしいというところは強調しておく必要があるのかなと思いました。今回は深く立ち入りませんが、やはり空き家、空きビルなどの対応、対策は、都市景観の話だけではありませんし、担当の方の回答でも、今後、連携してやっていくというようなことを言うておりましたので、そういったところでは、他の部局との連携を

一層図るべきであると思います。

ただ、そこで一つ気になったのは、例えば委員長がご質問されていた都市景観の成果で何か市民の目に見えるようなものはありませんかということで、例えば、電柱の地中化は明瞭にぱっと出てくるかなと私は思ったのです。しかし、恐らくこれは道路部門の土木部の所管なのでしょうね。

○改革推進部長 おっしゃるとおり、電柱の地中化は建設局です。

○山崎副委員長 あれは、今、結構おやりになっていますね。ですから、札幌の顔になるような主要なところは相当埋まっていますので、そうしたところでパッと出てくれば委員長に合格のマークをいただけたのにと思いました。同じように、河川の整備も広い意味で景観につながるわけです。ですから、そうした視点、発想を持って都市計画であるとか都市景観の事業を幅広くやってほしいというところは強調したいと思った次第です。

○吉見委員長 そのとおりですね。

○改革推進部長 北大の横や駅前通は相当きれいになりましたね。

○山崎副委員長 きれいになりましたね。

○吉田委員 裏参道も全部埋まっています。私も同じことを思ったのですが、ここではないのだとちょっとびっくりしたのです。

○改革推進部長 道路部局がやっているのです、抜けているのです。

○推進担当係長 施策上のくくりとしては地中化も景観と同じ中に入っていますけれども、今回選んだ中には入っていなかったのです。種別が違うので今回の対象から外れたという経緯がございます。

○行政改革担当課長 幾ら役所が縦割りとはいえ、それぐらいはしないと自分の仕事にも差し支えるだろうと。

○吉田委員 それが、結局、一枚の絵がありますかという意図なのです。市民は部局を知らないのです、それを含めて描いてくれなければわかりません。

私は、今回、質問しても、もうこれはどうしようもないと思って逆に言わなかったのですが、観光より何より市民に全然伝わっていない事業ではないかと思います。一番密接であるべきなのに、ホームページを見てもさっぱりわからなかったのですね。ですから、あまりにも全体的なこと過ぎて言いづらいのですが、このマスタープランもわかっていないでしょうし、それこそ一枚の絵もありませんし、もっと伝え方自体を検討していくことがすごく必要ではないかと思います。全般に言えることですから、ここで追及すべきことなのか、ちょっとためらうところはあります。

○行政改革担当課長 都市計画は、審議会の委員も物すごく専門的です。

○吉田委員 逆に言えないのでしょうか。

○行政改革担当課長 北海道大学の教授とか、すごく専門的な方が専門的な見地でお話しになるのです。

○改革推進部長 過去には、小林先生もいらっしゃいました。

○山崎副委員長 講座も分かれていますからね。

○吉見委員長 建築というか、社会基盤のところも分かれていますね。

○山崎副委員長 都市計画の先生と道路工学の先生がいらっしゃいますからね。

○吉田委員 そういうところから私たちに下ろしてもらって翻訳者がいてほしいという感じがあります。

○石川委員 発言が難しいところですが、今回の選定は全て価値観に入ってくる部分が多いなと思って過去2年に比べて難しさを感じています。この辺が典型になってきていて、例えば、街路灯が揃っているとか、今言った電柱が埋まっていることをよしとする人もいれば、そこまではという人もいるわけです。わい雑なまちを許容する人も少なからずいる中で、何をもって正解というのは難しいと思っています。

ただ、今回は、そうは言っても、過ごしやすいような景観を立てているのかということで、自分もその目線にいかなければだめかなと思っています。ただ、正直、僕は、汚いよりはきれいな方がいいけれども、どこまでやるのか、やり続けても切りがないと迷いも随分ありながら今回のヒアリングを聞いていました。

でも、一応、目線は揃えざるを得ないかな、きれいな景観がベターな答えだと思ったのですが、その辺はいかがでしょうか。

○吉見委員長 合っていると思います。

都市景観はきれいでなければならないねということは、やはり、おおよその合意は得られると思います。一方で、何をもって都市景観がきれいなのかは、人によって価値観が変わってきて、石川委員が言われるようなことが出てくるのかなと思います。今、電柱の地中化の話が出ていますが、電柱がないのが美しいと感じられる方もいれば、わい雑という表現をされたけれども、雑多な電柱がある状態はいかにもアジア的な景観であって、いいと評価する欧米人もいます。

○石川委員 地中化に関しては、当然、コスト的な問題もあると思います。

○改革推進部長 無電柱化は、景観もありますけれども、もっと大きいのは防災なのです。地震が起きたときに、電柱がバタバタ倒れて道路を阻害するとか、ライフラインが通っておりますが、それも切れますので、それを地中に埋めて守るという両方があります。多分、防災の観点を否定される方はいらっしゃらないと思いますが、ただ、やはり、それと併せて景観という面から言うとうどうなのかと、両面があるのでなかなか難しいと思います。

○吉見委員長 電柱は一例ですけれども、それ以外のものでも、例えば、建物の高さが揃っているとか、今日の話だと面を揃えてほしいという話もありましたが、面が揃っているのはいいのかとか、建物の色はどうかとか、そういうのはまさに価値観による場所があります。そこは、実はなかなか評価しにくいところで、札幌の建物を全部真っ白にしろなんてことを我々が言えるわけがありません。ただ、抽象的ですが、都市景観をよくしていこうという目標に関しては、恐らく一致できるのではないかと思いますけれども、何が美しいか、何がすばらしいかはまた別ですね。景観に関しては、それに向かっていって

るかということであると思います。

一方で、歴史的な建造物にしても、しばしば札幌で歴史的な建造物が失われるというニュースが出たりします。歴史的な建造物だけに集中して言えば、こういう取り組みにもかかわらず、防げない、取り壊しということもまだあるわけです。それをこういう事業の失敗と見るか、限界と見るか、対象外と見るかということもあろうかと思えます。あるいは、逆に、昨年の場合では歴史的なものについて4件が補助対象になりましたとあって、それをもって成果があったのだと言えるのかもしれませんが。一方で、歴史的なもの以外だと、今のようにこれによって少なくとも都市景観が守られる一助にはなっているという判断に持っていけるかどうかですね。

○吉田委員 サッポロスマイルの議論に戻ってしまう気がしますが、結局、どういうまちを、誰のために、どうやって作るかというビジョンがわかりにくいから基準がわかりにくいのではないのでしょうか。きっとよく読めば示されているのだろうなと想像がつかののですよ。

○吉見委員長 そうだと思います。それがなくて具体性に欠けてくるのだと思います。つまり、啓発事業と言っても、景観を大事にしましょうという啓発事業はできるのです。しかし、どういうふうな景観にしましょうまでは言えない。だから、景観を大事にしましょうというところまではみんなが合意できますが、具体に入ると各論がいろいろ出てくるのだろうと思います。

○吉田委員 都心に関しても、何のためにこれをやるかというところが非常にわかりにくいですね。よく読めば、そうかもなと思うのですが、市民はここまで読まないですね。そうしたときに、何で都心に賑わいをつくらなければならないのかというキーワードが示されないとなかなか難しいかなという気がします。総合プロデュースをする人を決めるのはいいけれども、どういうふうに総合プロデュースをするかは札幌市が示すべきであろうと思いますが、そのキーワードは非常にわかりにくいということがあるのではないかと思います。

○吉見委員長 都心のことについて、都心の賑わいというのは、賑わいが落ちてきたとか、賑わいがなくなってきたということの裏返しでもあります。あえて言えば、それを復活させるために都心に重点投資していろいろな人が集まれるところにしましょうというのは、ここまで市が考えてきたプランのもとでやられていることです。

ただ、質問した結果として出てきた創成川のところも、先ほどお話があったようなほかのいろいろなプランとも重なっているのです。創成川について言えば、例のトンネルを一本化するという事業があって、その上で地上の部分に公園みたいな空間がつけられて、そこを安らぎと命名しているわけです。あそこに安らぎの空間を作るためにトンネルを掘ったのか、トンネルを掘った結果できたのか、できた結果、そこをこういうふうに無理やり位置付けたのか、あるいは、そもそもこういう空間をつくるために道は下に行ってもらわなければいけないとなって道になったのか、そのあたりがよくわからなくて漫然としてい

る部分があります。主眼は、どちらかというところから来たのだと思います。

○行政改革担当課長 それは、わかりません。

○吉見委員長 景観の話につけて言いましたけれども、その結果、割とばらばらな見た目になってしまうことがどのまちでも多くて、せっかくやっているのに統一感がないと。本当は自分でやっている事業だから景観という意味では統一感を出せるはずなのに、まさにアジア的というか、雑多な空間を自分で作ってしまうことになることが多いです。その部分だけ見ると、デザイナーを頼んだりしてやるけれども、ばらばらに入札するものだからみんなさまざまなデザインにしてしまって、結局、それが適用されるとみんなてんでばらばらなスタイルになります。そういうふうに、景観という観点から統一感のある都心まちづくりの計画になっているかというところ、何となくしっくり来ないものがあったのです。色使いとかなんとは私の思いつきですが、ほかにこれだという明白に見えるものがあれば、それはそれでいいのですけれども、やはり、なかなか見えにくいですね。後から理屈がつくという感じがどうしても拭えないのですが、それはこれ以上言いません。

回遊性と言いましたけれども、やはり地下から地上に上げるというのは回遊性がないのですよ。ないというか、非常に限定されますね。カナダのエドモントンは、地下鉄を掘って都心に誘導しようとしたのです。一方で、カナダのまちは、スカイウォークと言いますが、2階をつないで2階で回遊性を確保することをよくやります。暑いところもありますが、北米などの寒いところが多くて、そういうことをよくやります。地下で面での回遊性を確保したのはトロントぐらいです。トロントは大きいまちでして、それを確保していますね。一方で、2階で確保しているのが、それよりも小さなお金のないまちで、代表的なのはカルガリーです。カルガリーは、ビルとビルの2階を丸井今井にあるような通路ですと結んでいって、知っている人がいれば真冬であっても都心をほとんど回れます。ですから、我々ではよく路面にあるようなマクドナルドとか銀行の支店とかキャッシュボックスは全部2階にあります。つまり、零下20度、30度になるような寒いところであっても、市民は都心へ出てきて2階で移動できるのです。

○吉田委員 札幌向きですね。

○吉見委員長 私も、時々、そういうことを言うのですが、札幌はどちらかというところトロント型で、つまり、お金はかかるけれども、全部地下でつなごうとしたのです。トロントは、大体のビルが地下1階、2階を持っているので、その間を地下通路で結ぶのですよ。その図面がところどころに張ってあって、それを見ると、大体、都心の地下鉄駅の二つ、三つ分ぐらいは駅を含めて回れます。ただし、迷路みたいになっていますから、知らないとは回れないので観光客には難しくハードルが高いですが、そういう構造になっています。

エドモントンは、その両方をやってしまったのです。地下鉄を作ったから地下の部分と、2階のスカイウォークもやったけれども、結局、地下から2階までの昇り降りが必ずありますね。そうすると来ないです。結果として、ウェスト・エドモントン・モールという郊

外の物すごく大きなモール施設にお客が集まってしまって、都心はシャッター街になっています。あれは、失敗例と言うと大げさですけども、お金をかけた割にはうまくいかなかった例です。

だから、回遊性の観点からは、昇り降りをさせると、そこはきついですね。創成川とか東4丁目は都心との回遊性が難しいにしても、さっき議論があったみたいに西2丁目とか南1条を地下で結んで回遊性を増すというのは、回遊性というキーワードだけで言えば何となくわかりますね。ただ、この統一性は、回遊性だけの問題ではなく、別のところで統一的な計画があるのかもしれないので、それは何なのだろうかと、都心の軸と拠点のつくり方の関係がよく見えないのです。

○松本委員 私が今から話すこともただの感想レベルに近いのですが、地下歩行空間ができた当初は、がらんどろだし、暗い空間をただ歩かせるような感じがして、あまり評価していなかったのです。私は道外出身ですが、札幌は雪の問題が結構大きくて、冬場は外を歩きたくないですし、多分、高齢者もしんどいだろうと考えたときに、地下歩行空間というのは一つの選択肢だったのかなと。ただ、委員長がおっしゃるとおり、下と上がばらばらであって、結構いろいろなところにエレベーターもありますけれども、どこまで高齢者や障がい者、妊婦に優しいまちになっているのかな、疲れたときに結構大変なまちだなと思ったりすることがあります。

それから、ここは評価の話なのでなかなか難しいですけども、私は、実は札幌のまちは全体として見ると結構統一感があるまちだと思っています。私は、九州出身ですが、九州の人から見ると、とにかくまちが近代的なのです。歴史があると言っても明治以降の歴史しか見えない部分も多いですし、割と最近の建物がプラスされて、とにかくまちが整然としていてビルがあるという意味では、大通の各エリアとか創世交流拠点のあたりも一定程度の統一感が保たれているのかなと思います。

そういう中で、創成川は、あれだけの公園をつくっても、冬場になると全く使われないのはもったいないなと思いつつ、それは札幌だから仕方がないのかなというようなことを思います。結局、夏場はすごく涼しくていいですが、冬場になると、みんな、果たして創成川から向こう側に行くのかという問題がありまして、地下を通せば別ですけども、それは限界のレベルだろうかなと、そんなことはプロジェクトを見ながら思いました。

○吉見委員長 雑談レベルですけども、地下歩行空間は後からつくりましたからね。南北線を掘ったときに一緒につくっておいたら、コストも安かったし、多分、うまくつながっていたと思います。

それから、作るときもさんざんいろいろな議論があったのですが、実は、あそこの横に建っているビルは、大体、地下商店街がありまして、そことの直結がほとんど進まなかったのです。直結していれば、さっきの話ではないけれども、あの地下歩行空間を中心としてビルがずっと地下でつながって行って、今、地上にあるような店の入り口とかキャッシュボックスなどが地下におりてくる構造になっていくはずだったのです。いろいろ事情

があって、結局、つなげるときの通路のお金は誰が出すかという問題が出てくるのです。それは、幾らかの補助は出ても、市が出してくれるわけではないのですね。

○改革推進部長 多分、道路区域で切っていると思います。道路区域よりこちらは民地なので、そこに税金を投入する何物もないので、その辺でもめるのです。

○吉見委員長 結局、ビルのオーナーは、そこに穴を掘って、その分をペイするぐらいにお客が来るのかというふうに言うと、札幌市ではそんなことは保証できないと言うわけですよ。当たり前ですが、保証なんかできませんから、それならそんなリスクは冒せないということで、掘らなかったらみんな通過してしまい、後になって、ビルのオーナーから、何で言ってくれないのだと、もっとちゃんと言ってくれたらつなげたのに、お客も入っていたのに、今から穴を掘るわけにもいかないだろうということになっているわけです。これは、ビルのオーナーの目がないとも言えるのですが、そういう流れが、あるところから分水嶺のようにみんな流れてしまって、我も我もでみんなつなげなかったのが真っさらな通路になってしまったのです。

ですから、これから新しく作られるビルについては当然直結ですね。ニッセイビルは後でつくったビルですから、最初からそのつもりであそこにファストフード店なんかを置いて、あたかも一体化して地下街みたいな雰囲気を作っているでしょう。あんなふうにするはずですよ。そうすると、当然、ビルにも入ってきてもらえるし、ビルの価値が上がります。

すみません、脱線しました。

○松本委員 建て替えがふえて、賃料を上げているところも多いですね。

○吉見委員長 そういうことも目的の一つですよ。せっかくお金をかけてああいう地下通路を掘ったのだから、沿線の賃料が上がってきてもらわないと。上がるということは経済も上がるということで、それだけの価値が上がるということです。

こういう形でやるから仕方がないのだろうけれども、やはり、札幌のまちづくりという全体の枠組みの中でいろいろな事業がどう位置づくのか、その有機性は非常に見づかったなというのが感想です。また、先ほど言いましたが、都心以外の地域がどうなのかについてはよくわかりません。コンパクトシティというキーワードが今のマスタープランの中に入っていますけれども、いつだったか、あの言葉がはやるのころがあったのですね。

○改革推進部長 それこそ、説明の中にあつたように、平成12年ごろに作った第4次長期総合計画のころだと思います。

○吉見委員長 そのころにはやっていましたね。

ただ、本当にコンパクトシティをやったところは日本にはないのですね。青森市なんか代表的だと言われるけれども、一遍広がったところを狭めたという例はほとんどないです。今、夕張が必然的にコンパクトシティになりつつあるのではないかという話がありますが、本当にやるのであれば、強制移住ではないですけども、それに近い形で、あるいは、郊外に住んでいる人たちを追い出すとか、住みにくいねという施策を採らなければ

ばいけません。ところが、日本の都市だとなかなかそこまではできなくて、節々でお話を聞いたのは、つまり、今より広げないという意味のコンパクトシティということです。今より広げないという意味だとすると、これだけ大きなまちですから、今ある副都心の位置付けもないと、みんな大通においでというわけにもやっぱりいきません。そうすると、そういう拠点の部分は、今は大通、都心に一生懸命だけれども、札幌市全体のまちづくりを考えたときにどういう位置付けになるのか。今まで発展したところがそのまま発展すればいいのか、あるいは維持されればいいのか、それとも、新しく作られるべきところがあるのか。真駒内とか苗穂という話が出たのは、どちらかといえば新しく作る話に近いのですが、そのあたりで札幌市全体の計画との間が見えにくかったなという気がしました。その辺は、質問のしようがうまくなかったのですね。

○石川委員 感想でもありますが、例えば、最初に説明があって、そもそも割と資料も出しているという背景があることに改めて気付くわけですけども、やはり、最初の説明もそれなりに意味があるのだなと思いました。今回はそこを完全にカットして個別の質問から入っていますが、全体像をご説明してもらうことも意味があるなと今回の冒頭に感じました。だけど、任せるとどうしても長くなってしまって、淡々と説明してしまうという反省があって今回は個別から入ったのですが、良い面と悪い面があったかなと思います。

○吉見委員長 物によると思いますね。今回のまちづくりに関して説明を求めても、今言った私が求めていたようなものは、多分、出てこなかったと思います。こういう事業になってしまうと、いただいた資料以上のものはなかなか出てこなかったのではないかと思います。全体の計画は実はもうもらっていますからね。

まちづくりの事業の連関性の説明は、やはり、どこかでされるべきことなのかなとは思っています。私たちがわかっていないということではなくて、現になかなか説明されていないのではないかと思います。全体のプランがあって、それこそ風呂敷を広げたような非常に漠然としたプランはあります。それがそれぞれの事業に落とし込まれていく段階で、例えば、ここで言えば南1条まちづくりとか、大通交流拠点とか、創世交流拠点というふうな個別のものになっていくのですが、個別のものになっていく段階で、本当は大もとであったはずのものが何となく忘れ去られてしまって、個々のところでいろいろやられてしまいます。連関はどうなるのですかと言うと、抽象度がぐっと上がって、1枚物の絵みたいなものが出てきて、これは地理的につながっていますみたいなものが出るけれども、そういう連関ではないはずなのです。札幌市のまちづくり全体の中での連関、そして、それが事業に落とし込まれたときにどう生きているのか、隣の事業との共通性が意識されているとか、そういったことになる大変弱くなってしまおうという感じがしました。

ほかには何かございますでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 もしかすると、これは後でまとめるのが大変かもしれなくて、特に報告書にまとめるときにどうするかということがありますが、そこでもう一遍悩みましょう。

特になければ、委員による意見交換（論点整理）を終わりたいと思います。

#### 4. その他

○吉見委員長 次に、最初に申しましたように、市民ワークショップの進め方等について、検討といいますか、理解しておこうと思います。

資料を用意していただきました後、引き続き、事務局から説明をお願いしてよろしいでしょうか。

○推進担当係長 私から、9月28日に予定されている市民向けのワークショップの資料についてご説明いたします。

まず、テーマ設定の考え方については、今、お渡しした資料の3枚目、4枚目になります。

左側になりますが、委員会における評価対象の選定理由と、ワークショップにおけるテーマの選定理由が書いてあります。こちらについては、事前に皆様にメールで資料をお送りさせていただいてご了解をいただいていると思います。これを受けて、当日のワークショップでどんな形で進めていくかというのは、右側にワークショップの進め方（予定）と書いてありますように、今回はこちらを中心に説明させていただいて、こんな流れでよろしいでしょうかということを確認させていただきたいと思っております。

先日、ワークショップの運営をお願いする業者が決まりまして、きょうは、石塚計画デザイン事務所の方にもお越しいただきまして、ご一緒に説明させていただければと思っております。

私からは、以前にお送りした3枚目、4枚目の左側にありますそれぞれのテーマの評価対象の選定理由とワークショップにおける事業の選定について、委員会としての決定内容になりますが、これを説明させていただきたいと思います。

まず、午前中は、3枚目の防災の関係のワークショップを予定しています。ワークショップの議論テーマとしては地域防災力の強化についてです。

行政評価委員会における評価対象の選定理由ということで、なぜこの施策を選んだかということでもあります。

札幌市では、平成16年に危機管理対策室を設置して、地域防災計画を策定するなど災害に強いまちづくりに取り組んできております。これまで、東日本大震災を初め、過去に発生した災害の被害状況などを踏まえまして、避難所、備蓄物資などの環境整備に努め、また、地域防災計画の整備、ハザードマップなどをつくり、市民向けの防災知識の普及啓発などに取り組んできました。こうした行政の取り組みは、当然欠かせないところですが、一方で、災害が発生した際に重要となるのは、昨日もお話が出ていましたけれども、地域の方々が自主的に行う防災活動、そして、災害に対する市民一人ひとりの日ごろの備えであることから、自主防災組織などを中心とした地域の防災力を強化し、市民の防災への意識を高めることが、札幌市全体の防災力を高めることにつながると考えられます。札幌市

では、こうした地域防災力を高めるべく、市民の方に対して普及啓発の取り組みを行っていますが、防災活動の担い手の確保、市民意識の向上などの点でまだ課題があるのではないかと考えられます。

以上の点から、地域防災力を結集した災害対策に関する施策、事業について議論することが重要であると考え、委員会としてはこの施策を選定したというふうに書いております。

それを受けまして、ワークショップで議論するテーマとしては、『地域防災力の強化』としております。札幌市において想定される地震は震度6弱以上の強い揺れとなることが想定されておりまして、委員会の議論の中で災害に対する備えを行っている家庭の割合は、えがお指標にありますけれども、約70%にとどまっていることがわかりました。災害への備えについては、避難所や備蓄物資のように行政が採るべき対策も必要ですが、災害発生時に市民一人ひとりが主体的に行動できる準備体制が整っていることと、自主防災組織などの地域住民による助け合いで防災活動を行うことが被害を最小限にとどめるために大変重要になってきます。そこで、少子高齢化社会、防災活動の担い手不足などの課題もある中、地域における防災力をさらに向上させていくため、その課題や目指すべき方向性を市民の皆さんと共有して一緒に取り組みを進めていくことを目指して、今回のワークショップでは「地域防災力の強化について」ということを議論のテーマに選定したことを説明した上で、市民の皆さんにワークショップに入っていただくことになっております。

それを受けまして、右側になりますが、ワークショップの進め方ということで、こちらの説明をお願いいたします。

○石塚計画デザイン事務所 議論のポイントのご説明の前に、お二人の委員が今年度から初めてということもあるので、ワークショップや事前勉強会の説明を簡単にさせていただきます。

1枚目の資料に戻ります。

先日のプロポーザルの企画提案書ベースの資料になっておりますが、まず、ワークショップの目的ということで、市民生活への密接性というような観点から、特に市民感覚とか市民目線を踏まえて判断する必要性の高い事業について、市民のご意見を委員会の審議にフィードバックして効果的な評価が行えるようにすることを目的にする場となっているかと思えます。

今回、市民3,000名を無作為抽出して封書をお送りしたのですが、結局、参加を応諾された方は、防災のテーマが35名、都心のまちづくりが37名で、合計72名いらっしゃいました。午前が防災で、午後が都心のまちづくりということでワークショップを行います。それぞれ5グループに分けて、その際にはグループに私どものスタッフをファシリテーターとして付けて進行したいと思えます。

右側にワークショップの全体プログラムが簡単にありますが、午前の部、午後の部とそれぞれありまして、下にワークショップの詳細プログラムがあります。まず、論点に対する課題出しということで、市民の目線から見た市の事業に関する現状における評価、市民

感覚で見るとこんな問題点があるのではないかというような意見を出していただきます。その後、中間発表ということで、各グループでどのような話題が出されたのか、グループのファシリテーターから発表していただいて、ほかのグループのご意見も共有していただく時間を設けます。その際には、原局から追加説明をいただく時間もとりたいと思います。ワークショップの後半では、課題を踏まえた改善提案のまとめということで、事業の改善の方向性とか、こういった方向が市民にとってはいいのではないかというような意見を出していただく時間や、ほかのグループの意見を聞く時間を設けます。最後に、どのようなご意見が出されたのか、皆さんがその場で確認して帰られることも大切なポイントだと考えていますので、それが視覚的にわかるように、各グループのご意見を短冊状のものに三つから五つぐらいずつまとめまして、それを全体で確認する時間も設けたいと思います。

次のページに移りますが、そういったワークショップを行うに当たり、市民の方へきちんとした情報を提供して、正確な情報をしっかり得ていただいた上で、判断するなりご意見を言っていただくのが重要なことだと考えていますので、9月10日に事前勉強会を午後の部と夜間の部で行います。事前勉強会の目的としては、ワークショップの目的や行政評価における位置付けを正しく理解してもらうこと、検討テーマ、市民意見に求められる論点に関して委員会の考え方を理解してもらうこと、これに関連する事業内容など必要な情報を提供して理解を深めてもらうこと、それから、ワークショップの当日の流れ、進行方法についても理解していただきます。また、事前勉強会の1週間くらい前に資料をお送りする予定ですが、この資料の内容にプラスして必要な資料はございませんかということで参加者からご意見を伺います。さらに、これまで行政評価への市民参加はどのような施策や事業に反映しているかを知ってもらうといったような目的で開催いたします。

そういうことで、9月10日の事前勉強会、9月28日の本番までの流れは以上のようになっています。

それでは、先ほどの3枚目ですが、地域防災力の強化について、ワークショップの議論のポイントに移らせていただきます。

前半は、市民目線で現在の市の取り組み、事業はどうかということを出していただくところですが、これまで、皆さんはどのようなときに防災について考え、日ごろどのような備えを行っているのでしょうか、また、町内会などの身近なところで行われている防災活動を耳にしたり、実際に活動に参加したことはあるのでしょうか、市民一人一人が日ごろの備えや地域の防災活動に取り組んでいく上でどのような課題があるのでしょうかということで、個人個人の備えとか地域での共助の部分も含めて、個人個人にヒアリングをするような時間も恐らく入ってくる感じになると思いますが、そういった現状の課題出しをしていただきます。後半は、札幌市では、市民の皆さんの防災意識を高めるため、各種パンフレットやマップの製作、小・中学生向けの防災教材づくり、出前講座などを行っています、また、地域での自主防災活動を支援するため、活動体制が整った町内会への活動資機材の支給や防災訓練などの活動への支援を行っています、しかし、災害による被害を

最小限にとどめるためには、今後、さらに地域の防災力を高めていく必要があります、前半の議論を踏まえ、市民一人ひとりが日ごろの備えや地域の防災活動に取り組んでいくために、札幌市が行う取り組みとしてどのようなものが効果的と考えられるのでしょうかといったようなことを議論のテーマとしたいと考えております。

○推進担当係長 まず、防災の方はこんな形でどうでしょうか。

○吉見委員長 実際に石塚計画デザイン事務所の皆さんに進めていただくので、その進め方によっては、当たり前ですが、市民の方々は誘導されます。変な言い方ですが、どこに誘導してもらいたいのか、どういう意見がたくさん出てくるようにしてほしいかということがあれば、そこをうまく盛り込んでおいてもらおうと我々としてもやりやすいと思います。

私の感想からお話しますと、まず、ワークショップの前半と後半はこういう部分でいいかと思います。前半は、どちらかという、市民が自分たちはどうするというお話で、後半は市にどうしてほしいというふうに分けている感じがします。ですから、両方が大事で、順番はどっちがいいかは私もよくわからなくて、どっちでもいいのかもしれませんが、まず、前半の自分たちはという部分については、今回の防災の話を知っていると、市からすると、あれをします、これをしますとか、市民の意識啓発に偏っていて、防災のために市民からアクションを起こしてもらおうとか、いざ、何か問題が起こったときにこういう役割を果たしてもらおうという観点は割と少なかったのです。むしろ、市民側から、実際に災害が起きたときにこれができますとか、こういうことをしますという話が出てくると、逆に、市がそこに沿うような動きとか、それを補完するような事業、施策ができるでしょうということがストーリーとしてあると思います。

今のところでは、市民はあくまで防災に関して市が提供するサービスの受け手であって、何かしてくれるという位置付けの動きになっている感じがするので、市民は何ができるのか、するのかと。いざ、自分が被災者になったときに、あるいは、札幌市内で被害が出たときに、自分は何がしたいか、何ができるか、何をすべきかというようなことまで少し議論が出てくると、つながりが出てくるかなと思っていました。

○石塚計画デザイン事務所 結局、地域防災力と言っても、大もとはやはり個人個人の備えがあって、その次に地域での共助があるということになると思います。ただ、今、委員長がおっしゃったように、実際に起こったときに市民は何ができるのか、するのかということはあまり意識されていない方も多いと思いますので、最初はそういったところから、例えば災害が起きたときにあなたはどのように行動するのか日ごろ考えていますかといったところから入ると、話しやすかったり、自分の状況を振り返るきっかけになるのかなという気はします。

○吉見委員長 後半については、その上で、自分たちがやろうと思ってもできないこととか、あるいは、結局、市にやってもらわざるを得ない、やってもらわねばならないということに関わってくると思います。普段、もしかすると自分たちが知り得ないような情報をもたらすとか、それは市から見ると防災意識の高まりという話になるのかもしれませんが、

こんなことをやるといいのだねというようなことがわかるとか、あるいは、現に災害が起きたときに市にどういうことをしてもらおうか、何を期待するかということが少し具体のレベルで出てくるとわかりやすいし、後のことがやりやすいかなと思います。

それは、今まで出てきているいろいろな市の資料で見える部分があって、ここに出前講座、防災教材、活動資機材の支給と書いてありまして、活動資機材とは一体何なのかとか、訓練はこれでいいのか、あるいは、ここには書いてありませんが、きのうは非常食の話もありました。2食は食べられる非常食だそうです、2食だけ食いつなげればいいのかとか、反面、そこには1週間分、2週間分もとなると膨大な予算になってしまうという問題もあって、逆に非常食はもう要らないということなのか、いろいろあると思います。非常食だけ議論をしてもらおうとは思っていませんが、つまり、これは事前勉強会になるかと思えますけれども、今、市が提供しようと思っていること、していることを理解してもらった上で、それでは不足でしょうか、これもやってほしいとか、これは要らないという話になってくると議論としては物すごくいいかなという気がします。今やっていることがすばらしいね、で終わってしまうと、市民ワークショップをやった中で我々が拾えることがなくなってくると思えます。

○吉田委員 もし可能ならですが、昨日は、町内会単位、高齢者単位での防災活動に限界が来ているという議論が結構あったのです。働き盛りの20代から40代ぐらいの男性をどう防災活動に巻き込むかみたいなことについて、もしヒントが出てくるならすごくいいのかなという気がします。そのきっかけを何かここに繋げて拾っていただけるのだったらいいのではないかと思います。

○石塚計画デザイン事務所 今、委員長がおっしゃったような非常食の量の判断は、一市民にとっては難しい面もあるかなという気もするのですが、今、吉田委員のおっしゃられたように、20代とか40代の若い世代をどうやって防災活動に引っ張り込んでくるか、いい知恵がないかというところこそ、市民の意見を聞いてヒントを得るなり、市の取り組みに対する意見を引き出せる部分がより大きいかなという気もしました。

○吉見委員長 そういう意味では、市民の最初の事前勉強会で、まさに市が何をやっているのかということをも具体的にわかっていただくようにしてもらえればと思います。教材づくりと言っても、どんな教材で、どんな形でやっているのかとか、出前講座と言ってもそれだけだと想像するものはいっぱいありますので、もう少し具体的なイメージが出るものにするといいのかなと思います。

非常食と言ったのは、非常食は具体的でわかりやすいからです。市がやっていることで、教材づくりとかマップづくりとかパンフレットの提供だと想像されるものはいろいろありますが、パンフレットでも、こんなパンフレットだったら要らないよねというパンフレットもあれば、これはわかりやすいというパンフレットもあります。そういうことまで市民がわかるようになると、市に対して言いやすいのかなと思います。

○石塚計画デザイン事務所 そうすると、一応、事前勉強会の資料として、そういったパ

ンプの現物は要らないのではないかと、グループに1冊ずつあればいいのではないかとという話もあったのですけれども、三十数名ぐらいただたらお送りいただいた方がいいのかなという気もします。

○推進担当係長 主なものは送ろうかという話をしていたのですが、全部となるといろいろなものをつくっていますので、皆さんに渡したように膨大になります。

○石塚計画デザイン事務所 例えば、防災教材でも小学校中学年、高学年といろいろあるのですが、そのうちの一部とか、「企業防災のすすめ」というような代表的なパンフレット、特に市民生活に関して日ごろこういうことを備えてくださいね、町内会でこんなことに取り組んでくださいねというようなことが書いてある代表的なものがあったらいいかと思えます。

○推進担当係長 より市民の方になじみやすいものですね。

○吉見委員長 恐らく、こういうものがないのではないかとというふうに言ったものの多くは、担当からは、それはもうやっていますで終わってしまいます。

○石塚計画デザイン事務所 結局、見ていないですよと市民は思われるかもしれませんね。

○吉見委員長 そうですね。ですから、やはり具体的なものを見て、これでは困るとか、こうした方がいいのではないかと、建設的というか、新たな発想の意見が出てくると、非常におもしろくなってきて、まさに、ワークショップをやる意味が出てくることになるのかなと思います。そこまで何とか持っていけないかなと思います。

○松本委員 私も、議論の枠組みとして、前半、後半をこのような形にするのはいいのではないかと思います。ただ、1点、お願いというか、聞いてほしいなと思うのは、ワークショップの本来の目的は、市民からこういうふうにしたらよりいいよという建設的な意見を聞くところにあることはもちろん理解しています。ただ、先ほどの前半の部分で言えば、どこまでは誰がすべきと一般市民が認識しているか、期待しているか。そんなことはあなたがすべきことだよということでもいいのですけれども、そういう意味でみんながどういう認識を持っているのか、前半の認識みたいところが一回は出るようにしてもらいたいということがあります。それでこそ、市が本来やるべきこと、あるいは、そこは市民にしてもらわなければいけないことですよというのだったら、その辺の教育をしていくことが必要になると思います。

後半でも、そこと似ていますが、議論の前段階の市民の認識を知りたいのです。例えば、各種のパンフレットをどれだけの人が見たことがあるのかとか、町内会でこういうことをしていると、どれだけの方が知っているのか、あるいは、参加したいと思うのか、ないしは、義務でも参加するつもりがあるかというあたりを聞いてもらいたいと思います。どういう形で聞くかはわかりませんが、認識がわかるようにしてもらいたいと思います。

というのは、市が幾らパンフレットをつくっても、パンフレットなんて見ないよ、NHKで札幌市の防災という特集番組をしてくれた方がもっと影響力は大きいというのだったら、予算とか事業だってそちらをやった方が効果的ではないかという意見にもなってくる

かもしれません。ですから、実際に市民がどういう状況にいらっしゃるかということも、ワークショップの中で少しわかればなと思います。

○石塚計画デザイン事務所 そうですね。前段のそれぞれの個人の意識とか状況をお互い共有していく中で、そのあたりも聞けたらいいなと思います。

○吉見委員長 ほかはいかがでしょうか。

○吉田委員 議論は、投げかけたときがスタートなので、どこから投げかけるかというのはすごく重要だと思います。ですから、勉強会をされるのはすごくいいなと思いますが、その勉強会の内容いかんで議論の内容もイコールになっていきます。しかも、説明したのに対する批判で終わってしまうのか、あれは一度忘れてください、あれは今のことから、これからやるためにはどうやっていくか、本当に皆さんの自由な発想で考えてくださいと投げかけるか、それで全く変わってくると思います。私としては、あれはあれ、だけど、今の時代、今のあなたたちにとって必要なものは何かということからぜひ議論を始めていただきたいと思います。たった3時間しかない中で調査と分析で終わってしまったら本当にもったいないと思います。

もちろんおわかりだと思いますけれども、私としては、そこを壊していいよというところから後半を始めていただけたらいいなということと、勉強会の中身をぜひ部局の方と詰めていただきたい。さっき委員長がおっしゃいましたが、やはり持って行ってほしい論点があるので、ぜひそこにつながる勉強会にしていきたいというお願いです。

○石塚計画デザイン事務所 これまでも勉強会をさせていただいたときに、割と質問もたくさん出るのですね。そして、どの回に出られたかによって認識が違ってくる部分も若干出てくるぐらい多種多様な質問が出て、その質問によって、また次の方の質問が引っ張られる部分も出てくるところもあります。その回によって、空気感は若干違ってきたりしますけれども、それでもざっくばらんにどんな質問でも市民目線を出してくださいというようなことでお出しただけのような雰囲気の中でやりたいと思っています。

○吉田委員 それは勉強会ですか。

○石塚計画デザイン事務所 勉強会です。

本番もそうですけれども、皆さん、自分がこんなことを言って大丈夫かなと不安を持って出られる方が結構多いと思います。ですから、本当に一市民が日常で考えていることをどんどん言っていいのですよというような促し方をします。論点があちこちに行くようなことにならないようには注意したいと思いますが、なるべく発言を制限しないで進めます。

○吉田委員 勉強会とワークショップをしっかりと分けるといいですね。勉強会は自由に言っていていいけれども、最後のまとめ方がすごく重要ではないかと思うのですよ。今日、さんざん出していただきました、ですから、ワークショップではこういう議論をしていきましようねという流れをつくるのが大事で、同じような観点でワークショップに出られるとファシリテーターがすごく苦労しながら雑多な意見をまとめることになると思いますから、実は2回あることが非常に有効で、やはり勉強会の持っていき方かなと感じます。

○石塚計画デザイン事務所 勉強会では、次の本番で議論するのが楽しみだと思ってもらえるぐらいにしたいと思います。

○吉田委員 勉強会でストレスを発散させるような感じかなと思います。

○吉見委員長 イメージがわからないことも多いので、まさに勉強会で何をやっているかを理解した上で出てくる疑問も多分あります。それがワークショップの場に出てくると非常に建設的かなと思います。

ほかはいかがでしょうか。

○石川委員 確認です。

35名、37名は、例年と比べて人数的にどうですか。

○吉見委員長 少なくなっています。

○石川委員 少ないのですね。

これでおやっ、と思ったのは、6人から7人かと思って、今までもう少し多かったかなという気がしたのです。

○石塚計画デザイン事務所 応諾者はもう少し多かったのですが、当日までに1割程度減ってしまうのです。

○事務局 例年、1割程度はキャンセルが出ます。

○石川委員 この後ですか。

○事務局 はい。

○石塚計画デザイン事務所 それを踏まえて、六、七名ぐらいになるかなという感じです。

○石川委員 なぜこの質問をしたかということ、さっき松本委員からも話がありましたけれども、僕の印象としては、やはり意識の高い人が集まるなというのがすごく強いのです。ですから、どういう議論になっていくかということ、正直、割といい結論で、みんなで頑張ろうという感じで終わります。そうは言っても、何かわからないけれども、来てしまったという若い人も1人、2人はグループに入っていたかなという印象があるので、六、七人の規模となると随分少ないかな、そうすると意識の高い人が四、五人になってしまうかなと、その辺は何となく少ないかなというふうに思っていました。

○石塚計画デザイン事務所 グループの進行上、一番やりやすいのは参加者6名、ファシリテーター1名ぐらいの規模で、8人までいってしまうと逆に厳しいです。一人一人のご意見を全部吸い上げるには時間が短くなってしまいます。

○石川委員 そうですね。今までは、どちらかということそんな感じですね。1人一言ずつぐらいのパターンが多くて最後は少しフリーかなという印象があったのですが、六、七人だと、逆にかなり濃くなるかなという印象もありますね。

○石塚計画デザイン事務所 参加された方も、六、七人ぐらいの人数の方が話しやすいと思います。

○石川委員 そうなのでしょうね。

○吉田委員 参加者が少なかったのは、テーマでしょうか。

○吉見委員長 この分析は、これからしないといけないのですが、幾つかあるみたいです。

○行政改革担当課長 幾つか要因があります。

○吉見委員長 その要因を分析しなければいけないかなと思います。

○吉田委員 別にテーマが悪かったとかではないのですか。

○吉見委員長 必ずしもそうは言えないと思います。昨年は、確かにごみとか市民の生活に極めて近いところをテーマに選んだのは事実で、そこからすればちょっと遠いかなと。ごみは毎回出すけれども、地震は毎日来るわけではないので、そういう意味で市民生活からちょっと遠いテーマなのは事実ですね。しかし、それだけが理由とは思っていません。

今、私は、地震と言ってしまいましたが、災害というのは市民にどういうイメージで捉えてもらえますかね。この資料について言うと、上には東日本大震災を初めと書いてあったり、選定理由には想定される最大級の地震はと書いてあったり、やはり地震というイメージで語っていますね。

○推進担当係長 やはり、札幌市は海から離れていますので、地震対策が中心かなと思います。

○吉見委員長 もちろん地震だけに絞るつもりはないので、いろいろな形でやると結構ばらつきが出る可能性もあるかなと思います。

○推進担当係長 そうですね、対策も変わってくると思います。

○吉見委員長 ですから、一つの考え方として、地震をイメージしてどうしましょう、今、地震が起こったらということでもやる方法もあるかもしれません。実際には、水害だったり、崖崩れだったり、特に今日やろうとすると広島市や礼文のイメージがあって崖崩れということでも語られてしまうかもしれません。

それでもいいと考えるのか、それとも、実際には崖崩れの場合、あるいは台風が来た場合など、札幌の人は台風の備えはほとんどありませんから、そういうことと地震がまぜこぜで語られた方がいいのか、悪いのか、ちょっと判断つかないですけれども、少し地震に絞ってもいいのかもしれないですね。

○石塚計画デザイン事務所 地震を想定される方は多いかもしれません。ただ、昨日、松本委員がおっしゃっていたように、備えというのはいろいろな災害で共通している部分がかかなり大きくて、例えば、日ごろ、家庭で備蓄しているものもそうですけれども、実際に避難場所に行くときに要支援者の人をどうやって地域で支えていくかといった観点で、台風でも水害でも共通している事項は幾つかあります。

○吉見委員長 ありますね、おっしゃるとおりです。共通している事項もあるのですが、していないところもあるので、していないところでいろいろな違いが出てきたらどうなのかなとちょっと思いました。ですから、そこはあえてあまり語らずに災害とやってしまうのか。ただ、これは地震と語っているので、地震に少し焦点を当ててもらって、それを前提に置いて、今、札幌市で大規模地震が起こったら、そして、あなたのまちが地震の被災地になったとしたらどうしますかというようなイメージで議論していただくのも一つかな

と思います。

○石塚計画デザイン事務所 その方がやりやすいかなと思います。

○吉見委員長 そうかもしれません。

○石塚計画デザイン事務所 例えば、土石流の危険区域とか、水害ハザードマップに指定されているところとなると、やはり札幌市の中で一部というところが出てきますけれども、地震だと活断層が入っている地域が札幌市のすごく大きな範囲で想定されていますので、ある程度は地震を想定した方が話しやすいかなと思います。

○吉見委員長 どこに住んでいるかわかりませんが、私の家はすぐ目の前に崖がありますし、そういうところにお住まいだったらまず崖崩れという話を語ってしまうかもしれませんからね。地震になっても崖が崩れるかもしれませんが、とりあえず、そういう意味でイメージをある程度共通化した方がいいかもしれません。

○松本委員 私個人は地震でいいのですけれども、防災というテーマだと、崖崩れを語りたいから、あるいは、自分の家の前の水害が心配だから、大雪の被害をおばあちゃんといつも心配しているからこそ参加したのにみたいな方はいらっしゃるものですか。

○吉見委員長 その可能性はあります。ですから、私が言ったのは、そういう意味で絞る弊害もあるのですよ。

○推進担当係長 そういう意見を出していただいてもいいのではないかと思います。主に地震を想定していますが、当然、広くご意見を出していただいて、その他の意見を出したらだめということにはならないと思います。

○吉見委員長 ほかにありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 次に、都心まちづくりです。

○推進担当係長 テーマとしては、札幌の魅力を高める都心まちづくりについてと設定しました。

委員会の施策、事業の選定理由としましては、先ほども話が出ておりましたが、今までは人口増加ということで市街地を整備してきました。しかし、これからは人口減少、超高齢化社会ということで、社会情勢の変化を踏まえて転換が求められています。そこで、こうした状況を踏まえて、札幌市のまちづくりの計画であるマスタープラン、都心まちづくり計画、都市景観基本計画などが見直される予定になっています。今後、将来を見据えた札幌の都市構造のあり方や都心の魅力をどのように高めていくかということは大変重要な施策であるということで、この施策を選んだと書いております。

下のワークショップにおける議論のテーマ選定理由としては、大通を中心とした都心部については、多くのイベントなどが開催されまして、観光客も訪れるなど、市民の皆さんが集い、活動する場であり、誰もが札幌の魅力に触れることができる重要な地区と位置付けられています。今現在、地下歩行空間や、この前は北3条広場も完成しましたし、さらには、今後、北1西1街区には市民交流複合施設などが建設されまして、都心部には多く

の魅力ある空間が生まれていきます。しかし、こういった空間は、できて終わりではなくて、これをいかに活用していくかが重要になってきます。また、その空間を個別に活用するのではなく、有機的に連携させながら活用し、相乗効果を図ることが都心部の魅力を向上させることにつながると考えています。こうした活用の検討を行っていくためには、各地域の特殊性を熟知した地域住民や企業などの関係者、それから、多くの市民の皆さんとともに考えていくことが必要です。都心部の空間の有効活用を図り、魅力ある都心のまちづくりを進めていくため、その課題や目指すべき方向性について、市民の皆さんと共有し、市と市民の皆さんが一緒に取り組みを進めていくことを目指して、札幌の魅力を高める都心のまちづくりということでテーマ設定をしたと書いております。

続きまして、右側の進め方というところをお願いいたします。

○石塚計画デザイン事務所 前半では、この5年ほどで札幌の都心は変わったと思うことはありますか、また、変わったと思われた方はご自分の都心に対する印象や行動に変化がありましたかということで、日常生活の中からのお話を出していきたいと思っています。普通に考えて、変わっていないと思われている方はまずいらっしやらないと思いますけれども、それが行動にも変化があらわれているかどうかも含めてお聞きしたいと思います。

後半は、都心のまちづくりにおいては、地域住民や企業などの関係者が参画して一体的に都心部の魅力向上に取り組んでいます、今後、都心部のさまざまな空間や機能を有機的に連携させ、活用し、都心部の魅力をより高めていくために、札幌市が行う取り組みとしてどのようなものが効果的と考えられるでしょうかということで、そこに取り組みの例を三つほど書いてあります。これは、グループで話しやすいものをその中から選んでいただくようなイメージです。例えば、市民や来訪者が集い、憩うことのできる広場空間をどう整備していったらいいのかというようなこととか、高機能オフィスと賑わいを生み出す店舗や商業施設が複合したビルの建設誘導とか支援についてどう思われるか、それから、広場や道路を活用した地元企業や地権者、住民が主体となった賑わいづくり、イベントの開催支援に関してどのように考えられますかということなど、この辺はグループで話しやすいポイントを選択していただくことを想定しています。

○吉見委員長 こちらは、ご覧のように、先ほどの防災とは違って、我々が対象としている魅力あふれる都市のまちづくりの各事業からさらに絞られています。都市景観の話や、私がきょう質問したような副都心はどうかとかということはある程度外して、都心のまちづくりに絞って市民に議論をいただくということです。逆に言いますと、それ以外のところは我々の責任で評価をしていくこととなります。いろいろ入れると難しいこともあるので、私は、むしろ、今、市が一生懸命やっている都心のまちづくりに絞って議論をいただいた方がわかりやすいし、できるかなと思うのですけれども、まず、そこをご確認いただいた上で、何かご意見があればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○山崎副委員長 一つ気になるのは、ハードの話にもこれを特化するのか、ソフトだけなのか。ですから、3番目のポツのようなところに重きを置くのか、やはり、ポツの1、2

のところにするのか。当然、両方になってくると思いますが、重きの置き方をどうしたらいいのかというのはちょっと悩めますね。

○吉見委員長 これがどうなのかわかりませんが、市民に議論をいただくという観点からすると、まず、都心はどこかということのを少し考えていただくことが必要かなと思います。市にとっての都心は割とはっきりしています。その上に乗ってどうこうという前に、都心は大通と札幌駅の間でいいのかとか、あるいは、創成川まで入ってしまっていていいのかとか、この図だとぱっと見る限りは植物園も半分入っています。

○推進担当係長 結構広いです。

○吉見委員長 そうしたときに、本当に都心の賑わいを育むべき都心部というのがどの辺までで、どういうイメージでとればいいのかというのは、市民にどういう理解をされているのか、ちょっと気になる場所があります。これは、言い方はおかしいですが、ある意味では札幌市が勝手につくった都心ですから、賑わいを育むのは結構だけれども、そんなところは都心ではないよ、都心はここでしょうということがあってもいいかなという気はしました。その上で、今、札幌市がやっている都心のまちづくりに対する意見や批判がいろいろ出てくる可能性はあるのかなということですね。

都心というのは、どうですか。普通に考えると大通近辺で、札幌駅の北口は入らないのか、南口までですか。

○推進担当係長 創成川までと思っている人もひょっとしているかもしれません。

○吉見委員長 そうすると、今回、創成川以東を入れて考えているときに、そこまで都心を広げるのかという議論が出てきたりするかもしれません。それはそれで面白いし、建設的で市民らしい意見だと私は思います。そうすると、もっと広げろとか、ここもとか、あるいは、ここは都心ではないでしょうとなった中で、後半の議論、すなわち、では、どういう取り組みをするのかということがまた出てくるのかなと思います。別に、ここに引っ張られて、こういう拠点を整備するというのではなくても、もっと拠点があるかもしれません。そういう観点から、すすきのはどうなっているのか、すすきのは拠点ではないのかと言う人もいるかもしれません。

あとは、最初の議論のポイントは、勉強会でどういう資料とか議論が出てくるかはわかりませんが、これは関連部局で出された資料ですね。

○推進担当係長 はい。

○吉見委員長 多分、最後の地図のひし形で囲まれたあたりが都心という位置付けだと思います。それから、皆さんご存じだと思いますけれども、市の考えるものとか主要施設みたいなものがもう少しわかりやすく入るといいかなと思います。

例えば、市民交流複合施設はどこにできるのですか。

○推進担当係長 北1西1です。右側のピンク色の囲みです。

○吉見委員長 赤色の点々で囲まれているところですか。

○推進担当係長 そうですね。ピンク色の中のさらに赤色で囲んである北1西1地区です。

○吉見委員長 それから、テレビ塔は言わなくてもわかりますか。

市役所は要らないですか。

○推進担当係長 市役所は入っています。

○吉見委員長 ありますね。失礼しました。

そうすると、主要施設というのはこんなものでいいのですか。

三井JPビルがあつて、ニッセイビルはもうできているから無視していますね。

○推進担当係長 主にこれからのものを描いているようです。

○吉見委員長 何か有機的なつながりみたいなものが見えるといいですね。拠点があつて、さっきの軸も薄く入っていますね。そうすると、この地図でいいのかな。

まちのイメージがうまく出ればいいなと思ったのですが、ほかに何かいい方法がありませんか。

○推進担当係長 もっと目立つものをもう少し入れた方がいいでしょうか。

○吉見委員長 あまり入れ過ぎてもごちゃごちゃし過ぎてしまいますね。

○推進担当係長 テレビ塔とか時計台とかランドマークのようなものですか。

○吉見委員長 ちょっと入れたりするとイメージがわくかなということです。ここでいけば、それぞれのものがどこに属しているのかということです。

○推進担当係長 どういった場所に存在しているのかと。

○吉見委員長 この地図では、ピンクとかグリーンの色で囲ってあるのは要るのですか。

○行政改革担当課長 これは、市民の皆様には意味がないと思います。

○吉見委員長 あまり意味がないですね。どちらかというところ、こっちの方が目立ってしまつて、さっきの軸とか拠点が目立ちません。

拠点というの、例えば1ページ目の図から実際の地図に落とし込むと、随分丸の大きさが違うなと思います。例えば大通交流拠点は、もうピンポイントで地下広場のことを指しているように見えます。ところが、札幌駅交流拠点は、何というか、札幌駅あるいはJRタワーとか、あの辺だけではなくて、どうももっと広いエリアを指しています。

○推進担当係長 横に長い丸になっています。

○吉見委員長 そうですね。そうすると、大通交流拠点も、もし札幌駅と同じ発想でやるのだったらもっと広い丸になるのではないかと思います。札幌駅の定義に合わせるなら、少なくとも地下鉄大通駅、東西線、南北線、東豊線を全部含めたぐらいのものが大通交流拠点ではないかと思うのですが、今度はそれが創世交流拠点と重なってしまっています。

創世交流拠点は、これまた随分広いですね。

○推進担当係長 以東地区も入っています。

○吉見委員長 結局、よくわかりません。

○吉田委員 市民の行動の拠点が入っていないからではないですか。何でファクトリーが入っていて、大丸とか丸井や三越がないのか。これを見ると、丸井は創世交流拠点なのかなと。

○吉見委員長 これは先ほども質問したのですが、多分、本当は作っている方も拠点をイメージされていないのだと思います。単に交差点で作っているみたいところで、それに入れたときに拠点の意味がそれぞれ違って、だからこんなふうになってしまうのかなという気がします。

○吉田委員 しつこく連携とか一枚の絵と言うのは、市民の行動に着目していないのではないかと思うからなのです。例えば、40代女性はどう動いているのかみたいなモデルとか、サラリーマンの男性はどう動いているか、そういうものがあってこそ拠点のエリアを決めたりするときのバックボーンになるはずなのに、これはすごく乱暴な丸ですね。

○吉見委員長 乱暴ですね。

○吉田委員 そういうことなのかなと思います。

○吉見委員長 都心を議論してもらうときに、もう少し市民目線という言葉がよ過ぎるけれども、そういう図にならないでしょうか。そこに市の考えている計画がかぶったときに、いろいろ問題点が見えると思います。

この図で言うと、多分、大通交流拠点と札幌駅交流拠点の定義が全く違いますよ。

○吉田委員 そうですね。

そして、この丸に入っていないところは何なのだろうという感じがします。

○吉見委員長 そうですね。

○松本委員 少なくとも、札幌駅交流拠点の右側なんかは、みんな札幌駅とは思っていないかもしれない。それとも、思っているのでしょうか。思ったより広いエリアですね。

○吉見委員長 これは、いろいろな意図があってこんなふうになっているのですよ。いろいろな思いがあってこうなっているのです。

○松本委員 たしか、こちら辺に大きな建物をつくるのですね。

○吉見委員長 そうなのがあるのですよ。多分、この丸を勝手にいじってしまうと、原局からすると、これはちょっとということも何かあるのではないかと思います。ただ、この模式図では、同じ大きさの丸をおおまかに描いてあるでしょう。まさに、交差点みたいなイメージでしょう。

○推進担当係長 これは、計画に載っている図から引っ張っているもので、多分、普通の丸で描いて詳細を実態に合わせていくとこういうふうになります。

○吉見委員長 これは、実際にこういうところに具体的な施設が入っていないとまずいと私は思っています。皆さんが普通に行くような場所が入っていなければいけない。すすきの駅とあればわかるものの、すすきのが目立つと、そこは何に入っていて、何に入っていないかがわかりますね。これで見るときには、少なくとも交流拠点に入っていないのは見えます。

だから、交流拠点のあり方は私もわからないですけども、さっきの丸に合わせれば、思い切って交流拠点と書くのだったら同じぐらいの丸の大きさにして、ぼんぼんぽんぽんと入れてやると。それから、軸も、これはこれでいいのですが、もう少し目立つようにする。

ピンク色と緑色ばかりが目立つのでこれは外してしまうとかして、今回の議論に沿った形の図になるといいなと思います。今、吉田委員が言われたように、市民が普通に使うような、あるいは、目にするような建物も少し入れてやるといいかなと思います。

○推進担当係長 たくさん入れることはできないと思いますが、これはあそこだよねとみんながわかるようなものを入れます。

○吉田委員 最初におっしゃったように、まちづくりは観光ともイコールなので、観光の拠点も入れるべきですね。

○吉見委員長 そうですね。

時計台がどこにあると言われて、ここと言える人は意外と少なかったりするのです。

○吉田委員 テレビ塔がないのも致命的のような気がします。

○吉見委員長 テレビ塔がないですね。

○吉田委員 それこそ、あそこが軸ですよ。

○推進担当係長 そこは、調整させていただきたいと思います。

○吉見委員長 あとは、後半の議論は難しいですね。だから、前半のところでどれぐらいのイメージや問題意識を持っていただけるかによって後半が決められてしまいます。

○石塚計画デザイン事務所 後半の取り組みの例の書き方も、現状は固過ぎると思いますので、もう少し市民にわかりやすいような表現にします。

○吉見委員長 イベントも、イメージの取り方が相当違います。これは、今回の対象施策ではないところでもありますが、都心のイベントと言うと、やはりすぐ大きなものとなって雪まつりなどが上ってくる可能性があります。それを否定するものではありませんが、取り組みの例というのは恐らくそういうイメージで書かれたものではないですね。

○石塚計画デザイン事務所 現状でどんなイベントがどんなスケジュールで行われているかという資料も必要になってくるでしょうか。

○吉見委員長 イメージ次第だと思います。例えば、こういうようなイベントという提案をいただきたいのであれば、それに沿うような形のイベントの例を出すべきです。例えば、YOSAKOIソーランとか雪まつりを出してしまうと、YOSAKOIソーランや雪まつりをどうしようみたいな話になってしまって、そこはちょっと違うイメージかなと思います。ただ、あっても、それはそれで別に使いますけれどもね。

ですから、前半でうまくイメージづくりをしてもらって、単に変わった、変わらないで終わらずに、都心のイメージを持って、もっと変わればいいねとか、こう変わればいいねみたいなというまちのあるべき姿のイメージみたいなものをそれぞれに持ってもらった上で、後半にそれが具体化されるといいと思います。そのときに、市にどういう手を入れてもらうか。市民は自分のお金ではできないわけですから、私はこんな都心がいいと思うので札幌市がこういうふうにやってくればいいなと、そういうふうな話の流れを持ってこられるといいかなと個人的には思います。

時間を超過していますが、ほかに何かございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○吉見委員長 ありがとうございます。

では、いろいろ申しましたけれども、当日は一番ご苦勞をかけると思いますので、よろしく願いいたします。

○石塚計画デザイン事務所 よろしく願いいたします。

○吉見委員長 ほかによろしいでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

## 5. 閉 会

○吉見委員長 それでは、長い時間、ありがとうございます。

これで終了したいと思います。

以 上